

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

現代メキシコにおけるマチスモと男性のアイデンティティ形成

2025年1月

氏名：川村望々香

学籍番号：202011745

指導教員：関根久雄（藤澤奈都穂）

目次

| | |
|------------------------------------|----|
| 第1章 序章 | 1 |
| 1. 問題意識、問題設定 | 1 |
| 2. 研究対象地域と対象者の選定理由 | 4 |
| 3. 研究方法、章構成 | 6 |
| 第2章 マチスモの文化的構築と普及 | 8 |
| 1. 文化が形作る男らしさ | 8 |
| 2. マチスモとは何か | 9 |
| (1)マチスモの概要 | 9 |
| (2) マチスモの二面性と定義の多様性 | 10 |
| 3. マチスモの起源 | 11 |
| (1) キリスト教的価値観の形成 | 11 |
| (2) 劣等感の形成と影響 | 12 |
| 4. マチスモの普及 | 13 |
| (1) メキシコ革命と文化表現 | 13 |
| (2) 大衆文化とマチスモの美化 | 16 |
| 5. 小括 | 20 |
| 第3章 マチスモの変容と男性アイデンティティの危機 | 22 |
| 1. メキシコにおけるフェミニズムの進展とその意義の概観 | 22 |
| (1) フェミニズムの展開 | 22 |
| (2) フェミニズムの成果 | 23 |
| 2. ジェンダー研究の発展とマチスモの変容 | 24 |
| (1) ジェンダー研究の発達と男性性の再考 | 24 |
| (2) マチスモの再解釈 | 25 |
| 3. マチスモと男性のアイデンティティ危機 | 27 |

| | |
|--|----|
| (1) アイデンティティ形成とジェンダー規範..... | 27 |
| (2) 自己不一致に苦しむ男性..... | 28 |
| (3) 自らに向けられる暴力..... | 30 |
| 4. アイデンティティ危機の深刻化..... | 31 |
| (1) 伝統と変化の狭間で深まる男性の危機..... | 31 |
| (2) 抑圧される男性の声 | 32 |
| 5. 小括..... | 33 |
| 第4章 グアダラハラの若者が語るマチスモと男性のアイデンティティ形成 | 35 |
| 1. インタビュー概要と調査対象者のプロフィール | 35 |
| 2. 高等教育と若者の「マチスモ」観 | 36 |
| (1) 高等教育とマチスモの実態..... | 36 |
| (2) 「マチョ」とは誰か | 38 |
| 3. 日常のマチスモと若い男性のアイデンティティ形成 | 40 |
| (1)語られない苦しみ..... | 40 |
| (2) 父親が与える影響 | 42 |
| (3) マチスモ的規範としてのサッカー | 43 |
| (4) 若年期に課される恋愛と性的経験 | 45 |
| 4. マチスモ的規範にとらわれた若い男性の苦しみ | 46 |
| (1) 涙を隠す若者 | 46 |
| (2) 孤独からの逃避..... | 49 |
| (3) 直面するコミュニケーションの壁 | 51 |
| 5. 考察..... | 52 |
| (1) 実際の自己と義務の自己の不一致 | 52 |
| (2) 実際の自己と理想の自己の不一致 | 54 |
| 第5章 結論 | 55 |
| 注 | 60 |
| 参考文献 | 62 |

| | |
|--------------|----|
| Summary..... | 66 |
| 謝辞..... | 67 |

表目次

| | |
|-----------------------|----|
| 表1. 調査対象者のプロフィール..... | 22 |
|-----------------------|----|

第1章 序論

1. 問題意識・問題設定

今日、世界各国で女性は目覚ましい社会進出を遂げている。ヨーロッパ、アジア、南北アメリカでは多くの女性がリーダーシップを発揮し、経済、政治をはじめとする多様な分野でその役割が拡大している。このような女性の活躍は、1850年以前には全くありえないことであった[ジャブロンカ 2024:216]。古代ギリシャを代表する哲学者であるアリストテレスは、女性を公然と軽蔑し、「男性と女性との関係についてみると、前者は自然によって優れたもので、後者は劣ったものである。また、前者は支配する者で、後者は支配される者である。そしてこのことは凡ての人間においても同様でなければならない。」と述べていたという[山本 1961:21]。家父長制は何世紀もの間、まず力、次に慣習、そして最終的に事実を是認する法律によって幅を利かせ、異議を唱えられることもなく君臨し、女性をその枠組みの中に縛り続けてきた[山口 1982:15]。

家父長制に関する、しばしば言及されるのが、「マチスモ」という概念である。チリのフェミニストであり、文化人類学者のブンステルは、男性性の一つであり、ラテンアメリカにみられるマチスモを、「グローバルな家父長制におけるラテンアメリカ的な表明」[Bunster 1986:13]とよび、国本は、「ラテンアメリカ文化の神髄」[国本 2000:38]と定義した。メキシコ社会に深く根付いたマチスモは、映画や文学において女性の抑圧的な生きざまを描くことで風刺的に表現されてもきた。2018年に公開された映画『ROMA』は、1970年代のメキシコシティを舞台に、上流階級の家庭で働く先住民族出身のメイド、クレオと上流家庭の母親ソフィアを中心に行開する物語である。クレオの恋人をはじめとする男性キャラクターたちは、典型的なマチスモの象徴として描かれ、クレオやソフィアを物理的・心理的に支配する。これらの描写は、社会的地位を超えてメキシコ社会に根付くマチスモ文化が、メキシコ人女性にとってどれほど抑圧的であるかを示している。

その一方で、伝統的マチスモは、18世紀末から現在に至るまでの間に変容しつつあるのも事実である[Castañeda 2019:254]。従来、マチスモの価値観において「オス」の身体的、経済的優位が絶対の価値であったが、それが揺らいでいるのである。かつての家父長制社会では、男が外で稼ぎ、女は家の中で夫と家族に仕えることが法律で定められており、それが社会的規範でもあった[Castañeda 2019:265-266]。しかし、18世紀以降、人類の長い歴史の中に存在し続けた伝統的な家父長制に亀裂が生じ[ジャブロンカ 2024:122]、こうした規範が通用しなくなりつつある。

このような変化の背景には、女性たち自身による運動、つまり「フェミニズム」が挙げられる。日本を代表するフェミニストで社会学者の上野は、何をフェミニズムと呼ぶかは視点の取り方によって様々であるとしつつも、それを「女性の性役割（ジェンダー）を問

題化した女性の自立的運動」[上野 1998:54]と定義している。フェミニズムという言葉自体は 1830 年頃にフランスの学者シャルル・フーリエによってはじめて使われたという[山口 1982:16]。メキシコにおいてフェミニズムが体系的、全面的に現出したのは 1876 年から 1911 年まで続いたポルフィリオ・ディアス政権期である[松久 2002:19]。政治的には「平和・秩序・進歩」という同政権後期の国家推進スローガンに基づく政策の時代から、1910 年のメキシコ革命という内戦へ移行する時期であった。フェミニストは、この革命とともに現れる新国家構想に参画し、女性の権利を求めて闘いながら、参政権や教育の機会、労働市場での平等な待遇など、社会における女性の地位獲得を目指した[松久 2002:16]。

その後、フェミニズムに由来する変革は、1970 年代から 1990 年代にかけて、メキシコの女性をめぐる環境を大きく変化させた。国本は、1975 年にメキシコシティで開催された、第 1 回世界女性会議を契機に始まった「国連女性の 10 年」の取り組みが、メキシコ社会に 20 年間で劇的な変化をもたらし、それまでの 400 年間の変化に匹敵すると評価している[国本 2015:20-21]。その結果、メキシコでは、多くのラテンアメリカ諸国と同様に急速に女性の社会進出が進んだ。メキシコ女性の社会進出の最も象徴的な例は、女性大統領の出現であろう。2024 年 6 月 2 日に投開票が行われたメキシコ大統領選挙において、クラウディア・シェインバウムがメキシコ初の女性大統領に選ばれ、同年 10 月 1 日に就任した¹。シェインバウムの主要対立候補であった野党連合のソチル・ガルベスもまた女性であり、大統領選挙はシェインバウムとガルベスの一騎打ちとなった。このことはメキシコ社会、およびメキシコ女性に大きな変化をもたらすと同時に、女性の地位向上を国際社会に示す歴史的な出来事であったといえるだろう。また、女性の教育水準は各教育段階においてほぼ男性並み、またはそれ以上となり、高等教育を受けたメキシコ女性の社会進出は多様化している。女性の高等教育入学者数および卒業者数はともに、男性を上回っている。世界銀行の統計によると、メキシコにおける女性の大学進学率は、2016 年に男性のそれを上回り、2022 年には男性が 43% であったのに対して、女性は 50% であった²。さらに OECD の統計によると、2021 年の高等教育の初回入学者における女性の割合は 53% であり、同年の高等教育卒業者に占める女性の割合は 56% であった[OECD 2023]。これに伴い、女性の労働市場への進出や、専門職、管理職に就く女性の割合も急速に高まっている[国本 2015:20-21]。ジャブロンカは、女性の社会進出について、「数千年のスケールで見たとき、20 世紀はその 1 世紀だけが全体から切り離された区切りのように際立ち、その遺産は無言の称賛に包まれる。ホモ・サピエンスの出現以来、初めて女性がその権利を享受し、あらゆる自由が認められた世紀であり、世界中の何億人もの女性の生活を改善した。」と高く評価している[ジャブロンカ 2024:216]。これは、フェミニズムが歴史的転換点において果たした役割の大きさを物語るものであり、女性の社会進出が社会全体にとってどれほど重要かつ意義深い成果であるかを示している。

一方でカスタニエーダは、フェミニズムの成果が顕著に表れる現代メキシコ社会では、マチスモ的価値観が大きく非難され、もはや支配的ではなくなりつつあることを指摘して

いる[Castañeda 2019:29]。マチスモ的価値観がメディアや教育を通して社会的に非難される一方で、伝統的な家族構造や地域社会においては依然として支持されるという二重構造が現代メキシコ社会では見受けられる[ナサンソン 2016:25]。このようなメキシコの現代社会における「伝統的なマチスモ的価値観」と「現代的な価値観」の板挟み状態は、多くの男性に深刻な心理的葛藤をもたらしているという[ジャブロンカ 2024:19]。このような現状を踏まえると、私たちは性別を問わず、男性が直面する危機に真剣に向き合うべきではないだろうか。フェミニズムの成果やさらなる男女間の不平等や課題ばかりが注目される中、それが男性性、マチスモに与える影響についての研究は十分に検討されているとはい難いものの、徐々に蓄積が進んでいる。

権力や支配の構造に根ざした男性性の歴史的変遷とその影響を、人類学的かつ社会的視点から考察した研究として、ジャブロンカの研究が挙げられる。ジャブロンカは、男性性は生まれ持つものではなく、文化や権力関係によって構築されてきたものであると主張し、家父長制や社会的なジェンダー規範の再考の必要性を指摘している[ジャブロンカ 2024:79-101]。また、家父長制や権力への固執が男性にもたらす内面的な脆さは、女性の社会進出による従来の「男らしさ」の崩壊によって深刻さを増し、ほとんど劇的なレベルにまで達していると、男性が直面する危機の深刻性にも言及している[ジャブロンカ 2024:220-221]。しかし、彼の研究は、マチスモと男性の危機を地域や国、世代ごとの差異を考慮せずに一般化しているため、特定の国や文化の事例を通じた深い分析が欠け、表面的な議論に留まっている。さらに、現代の男性が抱える苦悩に対する具体的な支援や解決策の提示が不十分である。

またラミレスは、急速な変化を遂げるメキシコ社会で、メキシコシティにおける若年層のマチスモの捉え方の変化について文化人類学的視点から検討している。ラミレスは、「生物学主義」「男根崇拜」「社会学主義（または機能主義）」といったイデオロギー的要素が背後にある従来のマチスモの象徴的意味を批判的に捉え、マチスモの意味が新たな価値観のもとで再構築されることを示唆した[Ramirez 2002:228-229]。しかし、同研究のインタビューは1998年から1999年に行われており、2024年現在の視点からすると、2000年以前のデータは現在の若者の価値観や社会状況を十分に反映していない可能性がある。また、インタビューで得られた若者の見解が主に言語的な自己表現に依存しているため、非言語的なジェンダー表現や社会的な行動観察といった多様なデータ収集方法が用いられていない。

一方で、カスタニエーダは、社会学、心理学、文化人類学的視点から、現代メキシコ社会に深く根付いた「目に見えないマチスモ (machismo invisible)」の日常的な形態について具体的な事例を挙げつつ検討している。カスタニエーダは、マチスモが単なる男性の女性に対する攻撃的な支配や抑圧にとどまらず、日常生活の中で無意識に再生産される文化的規範や制度によって男性に課す厳格な性別役割や期待という形で男性に影響を与えてきたと指摘している[Castañeda 2019:153]。また、ラミレスと同様に、メキシコにおいて過

去 50 年の女性の地位向上は、かつては尊敬の対象であった、感情を表現せず、権威を振りまく厳格で融通の利かない男性像を、もはや時代遅れで限られた、悲惨な存在へと変えたことを主張している [Castañeda 2019:154]。しかし、カスタニエーダの研究は、マチスモと男性の感情や社会的役割に焦点を当てているが、男性の多様性や文化的背景への考察については不十分である。

これらの先行研究の検討を通して、以下の課題が明らかとなる。まず、マチスモを含む男性性の研究において、特定の地域や文化背景を考慮した研究が不足していることである。マチスモは国や地域ごとに異なる特性を持ち、それぞれの文化や歴史的背景からの影響を受けているにもかかわらず、これらの違いに焦点を当てた分析が少なく、表面的な議論にとどまっている。また、マチスモは、家庭、職場、教育制度といった社会的構造を通じて形成、維持され、社会における性別役割や価値観の形成に影響を及ぼしているが、これらの構造が具体的にどのように作用しているのかについては明らかにされていない。さらに、メキシコにおけるマチスモに関する既存のデータや資料は 20 年以上前のものが多く、SNS の普及やジェンダー平等意識が急速に高まっている現代の価値観や社会的状況の変化を十分に反映しているとは言い難い。

以上の課題を踏まえて本稿は、メキシコの社会構造と現代的価値観の中で再構築されるマチスモが、現代の若年男性のアイデンティティ形成に与える影響を明らかにすることを目的とする。そのためには、マチスモ概念及び、その歴史的な展開を時系列的かつ包括的に検討することで、その本質を明らかにする。次に、現代メキシコ社会におけるジェンダー意識及び価値観の変化を踏まえ、マチスモが再解釈され、変容していった過程を明らかにする。そして、こうした変化がマチスモの再生産、つまり、若年層の男性のアイデンティティ形成に与える影響と、それに伴う葛藤や苦悩を、インタビュー調査を通して分析する。続いて、インタビュー結果と現代メキシコ社会の実態を照らし合わせ、若年層男性のアイデンティティ形成におけるマチスモの位置付けや、それがジェンダー平等の実現に向けた課題としてどのように影響するかを考察する。なお本稿では、これらの過程を通して得られた知見をもとに、メキシコにおける社会構造やジェンダー意識の変化に向けた社会の在り方を検討し、結論づける。

2. 研究対象地域と対象者の選定理由

本稿では、インタビューおよび分析対象を、「グアダラハラにおける 20 代の大学生」とする。グアダラハラは、メキシコにおける伝統的価値観と現代的な変化が共存する都市であり、特にジェンダー規範や男性性に関する本研究においては非常に鍵となる研究対象地域である。なお筆者は、2022 年 8 月から 2023 年 7 月までの 1 年間、グアダラハラ大学に交換留学生として在籍し、同地に滞在していた。

グアダラハラは、人口約 526 万人(2020 年時点)を有するメキシコ第二の都市であり、人口増加率が 10 年間で 16.5% に達するなど、急速な都市化とグローバル化の影響を受ける一

方で、保守的な価値観も根強く残っている³。歴史的に、グアダラハラを擁するハリスコ州は、カトリック信仰の強い地域として知られており、家父長制やマチスモの価値観が地域文化の中核を成してきた。毎年 10 月 12 日にグアダラハラのサボパン地区で行われる「ロメリア(Romería de la Virgen de Zapopan)」はメキシコ最大級のカトリック教の伝統行事のひとつであり、その日にはグアダラハラの学校が休校となるほどの一大行事である。この行事では、信徒、先住民のダンサー、兵士、司祭、神学生などが、グアダラハラ大聖堂からサボパン大聖堂までの約 8km の道のりを行進するほか、毎年 200 万人以上の観光客が訪れている⁴。また、男性による楽器演奏、歌、踊りが融合した音楽「マリアッチ(Mariachi)」はメキシコのマチスモ的アイデンティティの象徴である。それはハリスコ州で誕生し、グアダラハラを中心に発展した。マリアッチの演奏者は「チャロ(charro)」と呼ばれるメキシコのカウボーイ風の衣装を着用するが、このメキシコの「男らしさ」「革命時代の国民的英雄」の象徴でもあるチャロもハリスコ州で発展し、グアダラハラはその中心地として世界的に知られている。ロドリゲスは、グアダラハラを「メキシコらしさ」を象徴する都市とし、マリアッチやチャロといった伝統から生まれた象徴的力によって、人々がある種の固定観念や典型的な行動をとることを後押しする傾向が強くみられる場所であると指摘した[Rodríguez 2013:258-260]。

このように、グアダラハラではマチスモ的価値観が強く残る一方で、近年若者の間では、新たな価値観や文化的潮流が生まれている。筆者がグアダラハラで生活する中で、若年層におけるジェンダー規範や価値観の変化を実感する場面が多々あった。メキシコのマチスモ的価値観の中では、LGBTQ+の存在はタブー視されてきた。しかし、グアダラハラは、近年そのような性的マイノリティ・コミュニティに対して、他の都市よりも比較的寛容な都市として知られ、多くのゲイバーやクラブ、またコミュニティイベントが行われている。そのため、非公式ながら一部ではグアダラハラが「ゲイのまち(La ciudad de los gays)」と称されることがある。例えば、週末には市中心部の公園で性的マイノリティを対象としたイベントが開催されることがある。またグアダラハラの若者の中には、自身の性的アイデンティティを公にすることに対して大きな抵抗を感じない者も少なくない。筆者自身も、グアダラハラで生活する中でゲイ、レズビアン、バイセクシャルといった多様な性的指向を持つ友人と出会い、彼らとの交流を通じて、この都市におけるジェンダーや性的多様性に対する受容性の高さを改めて認識した。

また、グアダラハラには多くの高等教育機関が集まっており、数十万人規模の学生を擁するグアダラハラ大学、メキシコ屈指の私立大学のひとつである、モンテレイ工科大学、またグアダラハラ工科大学といった多くの大学が存在している。そのためグアダラハラでは、活発に学生コミュニティが形成され、学生運動や社会的活動が盛んに行われ、社会変革の主体として積極的に関与する若者の姿が見受けられる。毎年 3 月 8 日の国際女性の日には学校は休校となり、多くの女子大学生がシンボルカラーである白と紫を身に着け、中心街でマチスモやそれに伴うフェミサイド（女性の殺害）に対して大規模な抗議活動を行

う。その様子は全国ニュースとして取り上げられるのみならず、彼らの SNS や海外メディアによって世界中に拡散されている。

以上を踏まえると、グアダラハラは伝統的価値観と現代的価値観が交差する都市としての特徴が如実に表れた都市であることが分かる。ジェンダー規範や性的多様性に対する若者の新たな姿勢、学生運動の活発化、SNS を通じた意識変革は、都市全体の社会的ダイナミズムを象徴するものである。また、グアダラハラはメキシコの文化的アイデンティティ形成において中心的な役割を担う都市であると同時に、新たな文化的潮流の発信地でもある。グアダラハラの若者、特に大学生は、国際的なジェンダー平等の価値観を積極的に受容しつつも、家族や地域社会から伝統的価値観の影響を受けるという二重の文脈に生きており、このような環境は、彼らのアイデンティティ形成やジェンダー観の変化において重要な考察の対象となる。さらに、これまで都市の大学生を対象とした研究は、メキシコシティやモンテレイといった他の都市を対象とするものが多く、グアダラハラの大学生を対象として分析した事例は限られている。グアダラハラは伝統と現代性が交錯する社会的環境を持つ都市であり、この独自性を明らかにすることは、メキシコ全体におけるマチスモとアイデンティティの構造を理解する上で大きな意義を持つ。よって、本研究では、グアダラハラの大学生を対象にインタビューを行い、伝統的マチスモと社会的変化がどのように彼らのアイデンティティ形成に影響を与えていているのかを解明すること試みる。

3. 研究方法、章構成

本稿では、文献および、2022 年 8 月から 2023 年 7 月、2024 年 9 月から同年 10 月に筆者がメキシコのグアダラハラに滞在していた際の現地での参与観察、またグアダラハラの大学生を対象とした対面およびオンラインでのインタビュー調査の結果を資料として研究を進める。文献に関しては、メキシコにおけるフェミニズム運動、男性性及びマチスモの概念や歴史、男性のアイデンティティ形成に関する日本語、英語、スペイン語の文献や雑誌論文を中心とする。また、マチスモについて言及された、メキシコの文学作品、民謡、楽曲、新聞といった一次資料も適宜用いる。

以下が本稿の構成である。第 2 章では、男らしさの定義、マチスモの起源とその普及プロセスについて、スペイン植民地時代から 20 世紀後半にかけてのメキシコにおけるマチスモの歴史的な展開を整理する。続く第 3 章では、フェミニズムの進展がメキシコ社会におけるジェンダー規範の再解釈に果たした役割を整理し、マチスモが変容していった過程を論じる。また、この変化がメキシコ男性のアイデンティティ形成に引き起こす心理的葛藤や自己不一致、さらには急速な社会変化が彼らに与える影響を明らかにする。さらに第 4 章では、メキシコ、グアダラハラに住む大学生を対象としたインタビュー調査の結果をもとに、マチスモが現代メキシコの若者男性のアイデンティティ形成にどのような影響を与えていているかを考察する。第 5 章では、第 2 章から第 4 章を通じて得られた見解をもとに、「メキシコの社会構造と現代的価値観の中で再構築されるマチスモが、現代の若年男性の

「アイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしているのか」という問い合わせに対して回答する。その上で、メキシコにおける社会構造やジェンダー意識の変化に向けた社会の方向性について考察し、最終的な結論とする。

第2章 マチスモの文化的構築と普及

本章では、男らしさという概念について触れたうえで、マチスモという概念がメキシコ社会においてどのように位置づけられ、普及し、文化的価値観として定着していったかを明らかにする。まず、男性性のひとつであるマチスモの概要を説明したのちに、その起源についてスペインによる植民地化という歴史と関連付けて論じる。次に、メキシコ革命期、第二次世界大戦後のメキシコ社会において、いかにしてマチスモ的価値観が美化され、文化的規範としてメキシコ社会に普及、定着していったかを明らかにする。この過程を通じて、メキシコにおいてマチスモが単なる男性性の表現を超えて、どのように社会的、文化的な価値として根付いていったのかを考察する。

1. 文化が形作る男らしさ

男らしさとは何であろうか。それは、力強さや勇敢さを示すことであろうか。それとも、感情を抑え、自己を犠牲にして他者を守る姿勢を指すのだろうか。男が痛みや苦しみに耐えて自らの強さを示す儀式や割礼などの伝統は、大陸を超えて世界各地にみられる。また、男らしさとは、生まれ持った本能なのだろうか、それとも後天的に学習されるものなのだろうか。英語で *masculinity* と表現される「男らしさ」の概念については、世界中の多くの研究者たちがその本質や多様性を探究してきた。

男と女に関する研究は、1950年代までは 19世紀の機械的な見方に基づくパラダイムと結びつけられ、特に、「普遍的な男」と「普遍的な女」という属性類型の概念は、生物学や心理学における二元論から生じた性別理論に依拠していた[ギルモア 1994:25]。しかし、1960年代以降は、このような男女の性に関して生物学に基づいて、性を二極化する理論に異議を唱える動きが広がった[ギルモア 1994:26]。ミードはニューギニアの三文化の比較を通じて、性差が自然ではなく文化的に規定されることを初めて提起し[ミード 1961]、その後のジェンダー研究や人類学的研究に大きな影響を与えた。また、オートナーは、それぞれの地域において文化が男性を文化的領域、女性を自然的領域と関連づけることが男性性と女性性の社会的構築に影響を与えると指摘してもいる[オートナー 1987:90-91]。

これに対してギルモアは、「男らしさ」という概念が多くの社会に共通して存在する一方で、その表現方法や重要視される要素は文化ごとに異なること、さらには「男らしさ」の概念自体がほとんど意味を持たない、あるいは欠如している社会が存在することを明らかにした[ギルモア 1994:5-7,239]。ギルモアの研究は、性差が文化によって形成されることを示したミードやオートナーの議論をさらに進展させ、男らしさや女らしさが文化的に構築される現象をより確実に示すものとなった。

通常の男らしさの概念が存在しない社会としてギルモアは、フランス領ポリネシア群島

の一部であるソシエテ諸島に住むタヒチ人と、西マレーシア中央部に住む東南アジアの先住民族のひとつであるセマイ族の事例を取り上げている[ギルモア 1994:5-7,240-249]。タヒチでは、性別の役割や差異が西欧的基準に照らして異常なほど欠如しており、男女の区別が強く表示されることはない。女性は高い地位を持ち、男性と同じ仕事をこなすだけでなく、政治的影響力を行使し、スポーツにも参加することも許される[ギルモア 1994:240-241]。一方、セマイ族もタヒチ人と同様に、性差を重要視しない社会を特徴としている。彼らは「ジェンダー図式」を欠き、男女間の区別がほとんどなく、厳格な性別規則が存在しないため、個人は性別に縛られることなく自由に選択を行うことが許されている[ギルモア 1994:249-254]。このような例外的文化をギルモアは、「両性具有的文化」と呼んだ[ギルモア 1994:13]。それは、男らしさにおいて、自然よりも文化的変数の方が重要な要素であることを示している。

以上を踏まえると、男らしさとは文化的に構築された概念であり、決して普遍的なものではなく、地域ごとに異なる特性を持つため、それぞれの文化的文脈に応じた視点から理解することが必要であることが分かる。

2. マチスモとは何か

(1)マチスモの概要

これまでの議論を踏まえると、男らしさとは文化的に構築された概念であり、その特性は地域や文化ごとに異なるものであることが明らかになった。したがって、マチスモは、多様な男性性の一形態として位置付けることができる。さらに「男らしさ (masculinity)」と「マチスモ (machismo)」は異なる概念であると理解することが重要である。マチスモという概念は、1960 年代にメキシコ文化における男性性を説明するために提唱され、しばしば「過剰な男性性 (hypermasculinity)」や「有害な男性性 (toxic masculinity)」と関連付けて論じられてきた[Valdez 2023:2]。ギルモアは、男らしさを多くの場合、タフさや勇敢さ、年長者や女性への敬意、高い教養の習得といった、社会的に肯定的とされる特性として捉えている[ギルモア 1994:80-81]。一方で、マチスモは、攻撃性、冷淡さ、無敵性、さらには暴力の行使を特徴とし、特にラテンアメリカ文化における男性性を象徴する概念として、しばしば否定的な評価を伴って語られる[Morales 2015:27]。

「マチスモ」という言葉は、スペイン語の名詞「マチョ (macho)」に、「～主義」や「～的性質」を表す接尾辞 -ismo が加わったものであり、ラテンアメリカ文化において男性性を象徴する重要な概念とされる。「マチョ」という用語が見受けられるようになるのは、第二次世界大戦期の 1940 年代からであり、その後、徐々にポピュラリティを獲得していったとされている[林 2004:2]。モラレスはマチョを「生命の男性的極を表すもの」、つまり男性性の根源的なエネルギーや本能的な側面を極端に誇張した概念として位置づけている[Morales 2015:107]。「マチョ」という言葉は、スペイン語で本来「雄（オス）」を意味する単語であることから、動物的な要素も含んでおり[ラモス 1980:65]、動物的な強さ

やたくましさを象徴している。日本語の「マッチョ」はまさにスペイン語の *macho* を語源とし、「筋肉質で男性的な体型やスタイル」意味すると同時に、しばしばアニメのキャラクターや筋肉をアピールするポーズとして「マッチョポーズを決める」などコミカルな意味で使われることも多い。このように、日本においては、マッチョという語が筋肉質な体型といった身体的特徴を意味するのに対し、ラテンアメリカ文化におけるマチョは、身体的強さのみならず、精神的な強さや名誉へのこだわりを重視する点においてマッチョと大きく異なる。メキシコ文化では、マチョは、名誉や力強さを持つ男性像を指し、ルイスの著書『サンチェスの子供たち』の中では、いたるところで「たとえ相手に殺されても降参せず、微笑みを浮かべて死ぬ努力をする男」としてマチョが描写されている[ルイス 1986]。

このように、「マチョ」という言葉が文化的価値観や行動規範を内包し、「マチスモ」として体系化される過程を辿ることで、「マチスモ」という概念がラテンアメリカ文化における男性性の象徴として定義されていったことが理解できる。

(2)マチスモの二面性と定義の多義性

マチスモの定義は研究者によって多様であり、その明確化や再定義を試みる研究が数多く存在する[e.g. Morales 2015; Valdez 2023 など]。その理由のひとつに、マチスモが持つ二面的な性質が挙げられるだろう。近年は、学術研究や大衆文化において、家父長制や性差別、男性優越主義に関連付けられ、否定的な意味で用いられることが多い[Valdez 2023:2]。しかし、かつては“*ser macho*”（マチョであること）が肯定的な意味合いで使用され、勇敢さや責任感を象徴するものとして評価される側面もあった。このようなマチスモの定義の曖昧さは、その二面性、つまり「否定的なマチスモ」と「肯定的なマチスモ」の併存に起因すると考えられる。

モラレスはマチスモを二つの異なる形態に分類し、そのひとつを「真のマチスモ (authentic machismo)」と位置付けた。彼によれば、この形態は、勇気、尊厳、勇敢さ、寛大さ、ストイシズム（冷静かつ忍耐強い態度）、および女性への敬意といった、社会的に称賛されるべき特質を包含している[Morales 2015:27-28]。もうひとつの形態は、モラレスによって「偽のマチスモ (false machismo)」と定義されており、劣等感を基盤とし、それに起因する虚勢、臆病、傲慢といった否定的な特徴を内包しているとされる[Morales 2015:27-28]。

一方で、バルデスは、マチスモの要素を「騎士道精神(caballerismo)」と「伝統的マチスモ(traditional machismo)」というふたつの要素に分類して考察を行った[Valdez 2023:2-3]。「カバジエロ (caballero)」はスペイン語で「紳士」を意味する語であり、その概念は男性性における慈悲深さや理想的な在り方を象徴するものとされる。カバジエロとしての振る舞いは、感情的なつながりの重視、自己管理、家族への献身といった健康的かつ肯定的な行動と密接に関連している[Valdez 2023:2-3]。他方で、伝統的マチスモは、偽のマチスモにみられる特徴と同様に、精力、男性的攻撃性、そして女性支配といった行動に関連付け

られる[Valdez 2023:2-3]。

両者の議論は、マチスモを単一的な構造としてではなく、肯定的側面と否定的側面を同時に内包する多面的な概念として捉える必要性を示している。この二面性が、マチスモを単純な枠組みでは説明しきれない複合的な現象とし、多様な要素が相互に作用する中で形成される概念であることを示している。こうした特性こそが、マチスモの定義に多義性や曖昧さをもたらしている主な要因であると言える。

3. マチスモの起源

マチスモは、メキシコ文化を象徴するジェンダー概念として広く知られているが、その起源は、スペインによる植民地化の過程と密接に結びついているとされる。メキシコ人知識人による国民文化論の中では、マチスモに関する議論が植民地化との深い関連性の中で展開されていることが明らかにされていることから[林 2004:2]、マチスモを理解するためには植民地化という歴史的背景を踏まえた包括的な視点が不可欠であるといえるだろう。したがって、ここではスペインによる植民地化がどのようにメキシコ社会におけるマチスモの誕生と形成に影響を与えたのかを考察する。

スペインとポルトガルを中心とする大航海時代の1492年に、クリストファー・コロンブスが現在のバハマ諸島に到達し、その後の探検と征服が本格化した[大泉 2005:26]。メキシコにおいては、1521年のアステカ帝国の滅亡が重要な転機となり、スペインはその広大な領土を支配する植民地体制を確立した[大泉 2005:26]。スペインによる支配は政治的な側面にとどまらず、文化的、精神的な領域にまで及び、メキシコ先住民の価値観に大きな影響を及ぼした。特に、スペインによって持ち込まれたキリスト教的価値観と、それに伴う家父長制の強化、さらに植民地化の結果として先住民が抱いた劣等感こそが、後のマチスモ的価値観の形成に深く関わったとされる[Heep 2014:103; ラモス 1980:59]。以下では、この植民地化の過程で導入されたキリスト教的価値観がメキシコ社会におけるジェンダー観や男性性にどのように影響を及ぼしたのか。さらに、支配と被支配の関係から先住民男性の中に芽生えた劣等感が、どのようにマチスモの基盤を作ったのかについて見ていく。

(1) キリスト教的価値観の形成

植民地化に伴い、多くのスペイン人たちが新大陸に訪れたが、その目的の大半は富の獲得とキリスト教の布教であったとされている[大泉 2005:26]。スペイン人によるメキシコの植民地化においては、軍事的征服と同時に精神的征服が目指され、カトリック教の司祭が従軍してキリスト教の布教を行った[井上 2012:39]。ヒープによると、メキシコにおける男性性の基本的理解は、スペインの植民地化によるアステカ帝国の滅亡ではなく、むしろカトリック教会に根ざしているという[Heep 2014:104]。ジェンダー不平等の概念は、キリスト教の伝統に深く根ざしており、植民地化によるキリスト教の布教により、メキシコ人の本来の性質や役割が、宗教的な価値観や規範に基づく新しい考え方へ置き換えられた

という[Heep 2014:103]。

西洋の家父長制社会における男性支配は、キリスト教神学に基づいており、スペインによる植民地化の過程で、先住民男性のアイデンティティは、生物学的な男性性から社会的に定義された男性性へと移行した[Heep 2014:103-105]。女性の服従に関する最初の記述は『創世記』に見られる。最初の人間とされるアダムとイブが罪を犯した後に、神が彼らに与えた罰の一部として、「女に言った、『私はあなたの子を産む苦しみを非常に増やす…しかし、あなたの夫はあなたを支配する』」[Heep 2014:103]という言葉が挙げられる。

また、イエス・キリストが弟子に男性のみを選んだことも、女性を排除する神学的正当化として現在も用いられている[Heep 2014:103]。聖書を文字通りに解釈する人々は、男性が神のかたちに創られた存在であることを理由に、特権が与えられていると考える[Heep 2014:103]。さらに、聖書の中には同性愛をタブーする異性愛主義についても言及されており、それは今日に至るまでメキシコ社会に強く残るホモフォビア、つまりゲイに対する強い差別として現れている[Klinken 2013:4]。

また、メキシコ文化における女性らしさは、聖母マリアの崇拝に基づき、処女と母の理想的特徴としてのマリアの役割を強調する「マリアニスモ(marianismo)」によって特徴づけられ、マチスモの女性版と位置づけられている[Heep 2014:103]。現在においても、このようなマリアニスモが社会的規範に深く影響を与えていた様子を垣間見ることができる。筆者自身、メキシコ滞在中にその影響力を実感する場面に何度も出会った。たとえば、結婚前の純潔を重んじる価値観が根強い敬虔なカトリック教徒出身の若い女性が、パートナーの存在を両親に隠さざるを得ない、婚前交渉を断固として拒否する、といったエピソードを多く耳にする機会があった。また、メキシコの若い女性の間では、男性を自室に招くことをタブーとして避ける行動も一般的である。これらの純潔を重んじる振る舞いは、まさに性的快楽を否定しながらも女性が母親として生きることに社会的な意義と満足を見出せるようにしたマリアニスモに由来していることがうかがえる[Heep 2014:104]。

これらを踏まえると、スペインによる植民地化によってもたらされたキリスト教的価値観は、メキシコ社会におけるジェンダー観を形作り、マチスモという概念を生み出す原動力となったことが明らかとなる。

(2) 劣等感の形成と影響

マチスモの起源について、メキシコの植民地時代の文化的背景と密接に関連付けて論じる研究が数多く存在する[e.g.オスター 1992; ラモス 1980; Rodriguez 1999 など]。なかでもサムエル・ラモスの『メキシコ人とは何か』[ラモス 1980]は、メキシコ人特有の文化的特性としてのマチスモが、劣等感に起因するものであると初めて論じた重要な文献である。この文献は多くの研究者によって、メキシコにおけるマチスモの起源を理解する上で基礎的な研究と位置づけられている。ラモスは、前提としてまず、他者に対する劣等感が、その他の場面において優位を占めたいという焦燥や過剰な自己肯定の欲求につながる心理状

態を生み出すことを明らかにしている[ラモス 1980:59]。植民地時代にスペイン人を目の当たりにした、メキシコ先住民とスペイン人の関係は、まるで子どもと大人の関係のようであったとラモスは主張する[ラモス 1980:59]。つまり、誕生期にあったメキシコは、成熟した文明をもつスペインに遭遇したが、そのような文明を持たなかった先住民の幼児的精神ではそれを十分に理解できなかったのである[ラモス 1980:59]。さらに、たくましい体格を持ち、毛深いスペイン人に対して、落ち着いた茶褐色の顔立ちかつ小柄で無毛の体を持つ先住民男性は女性的にみえたという[Heep 2014:104]。加えて、林は、征服者としてのスペイン人、被征服者としての先住民女性、そしてその惨状を見守ることしかできなかった先住民男性という当時の社会構造も、彼らの社会モデルを大きく揺るがしたと述べる[林 2004:3]。ラモスは前提として、彼らは実際に劣っていたのではなく、単に劣等感を抱いていたにすぎないとしたうえで[ラモス 1980:60]、このような文明的、外見的、精神的に不利な状況から劣等感が生まれ、さらに征服や混血によってそれが悪化していったと述べる[ラモス 1980:59]。その結果、彼らは、自分たちがコントロールできる唯一の対象、つまり家族を通じて力を保持しようとしたのである[Rodriguez 1999:3]。

また、植民地化による劣等感の形成は、オクタビオ・パスの『孤独の迷宮』[パス 1982]でも重要なテーマとして取り上げられている。パスは、現代メキシコ社会に広く浸透する俗語「チンガーダ (chingada)」を分析し、この言葉を「無理に開かれ、犯され、もてあそばれた母」と解釈し、征服による暴力と屈辱の記憶を象徴する存在と指摘した[パス 1982:74-86]。スペインによる植民地支配は、先住民女性に対する暴力を伴い、それは先住民男性にとって屈辱的な体験であった[パス 1982:86-87]。その象徴的存在として、アステカ帝国を征服したコルテスの愛人かつ通訳であった先住民女性のドニーヤ・マリンチェが挙げられる[パス 1982:86]。彼女は征服者に利用された後に忘れ去られた存在であり、征服そのものの象徴となった[パス 1982:86-87]。またパスは、英語でいうところの“to fuck”に相当する粗野な動詞である「チンガール (chingar)」が、「閉ざされたもの（強者、マチヨ）」が「開かれたもの（弱者、チンガーダ）」に勝利する力学を示していると述べている[パス 1982:78-82]。彼は、この力学が植民地化で形成された劣等感を過剰な男性性として体現するマチスモの本質に繋がっていると指摘している[パス 1982:78-82]。

このように、植民地化の過程で先住民男性が抱いた劣等感は、社会的、心理的に補償を求める形で家父長的価値観を強化し、マチスモという特有の文化的現象を生み出す基盤を形成したと考えられる。

以上を踏まえると、キリスト教的価値観に基づく家父長制がスペインによる植民地化を通じてメキシコのマチスモ的価値観に大きな影響を与えたことがわかる。しかしながら、マチスモを特徴づける要素は、これらの普遍的な価値観だけでは説明できない。むしろ、植民地化という特異な歴史的状況の中で、先住民男性が征服者との不平等な関係性の中で抱いた深い劣等感こそが、マチスモの形成において決定的な役割を果たしたと言える。この劣等感が、自己肯定を求める過剰な行動や家族内での支配的態度に繋がり、独自の文化

的特徴を持つマチスモ的価値観を生み出したのである。したがって、マチスモの本質を理解するためには、キリスト教的価値観に基づく家父長制の影響だけでなく、植民地化の結果として生じた劣等感の役割を重視する必要がある。

4. マチスモの普及

ここまで議論から、メキシコにおいてマチスモの起源が、スペインによる植民地化による劣等感やカトリック教の影響に根差していることが明らかになった。それでは、マチスモはどのような経緯でメキシコ社会全体に普遍的価値観として広がっていったのだろうか。ここでは、マチスモという概念が社会のあらゆる層にどのような過程で普及し、文化の一部として定着したのかを考察する。

(1)メキシコ革命と文化表象

1910 年から 1946 年のメキシコ革命期は、民謡や文学などを通じて、マチスモという概念が表現され、マチスモが文化的ステレオタイプとして徐々に形成され普及する契機となった時期である[Buchenau 2015:1-5]。

メキシコ革命（1910–1946）は、ポルフィリオ・ディアス政権の独裁、農地の収奪、貧富の格差拡大を背景に起こった、20 世紀初頭の大規模な社会革命である[Buchenau 2015:1]。ディアス政権は 30 年以上にわたる中央集権的かつ権威主義的な統治を行い、アメリカの投資家や大地主が農地を独占した結果、多くの農民や先住民が土地を失い、社会的不満が高まった[Buchenau 2015:1]。メキシコ革命における内戦は 1910 年から 1917 年に起こったものの、それに加えて、1917 年から 1929 年の国家再建期、1929 年から 1946 年の制度化期を含めて、メキシコ革命期とされている。第一段階の蜂起と内戦（1910–1917 年）では、ディアス政権が打倒されたが、革命勢力内で社会的・政治的秩序に関する合意がなく、内戦が続いた[Buchenau 2015:1-5]。1917 年に制定された新憲法は、土地改革、労働環境の改善、外国資本の制限を規定し、社会的権利を初めて保証する画期的なもので革命の理念を象徴したが、その多くが完全には実施されず、農民や労働者の生活改善には限界があった[Buchenau 2015:1-5]。第二段階の再建期（1917–1929 年）では、新憲法を基盤に国家建設が進められたが、革命勢力間の対立や地域軍閥の抗争が続き、政治的安定には時間を要した。この時期には土地改革や労働条件の改善が部分的に進められた一方で、中央政府の権力集中が進行した。1929 年には革命政党が結成され、政治の安定化が図られた[Buchenau 2015:1-5]。第三段階の制度化期（1929–1946 年）では、革命政党が政治的基盤を築き、文民政治家への権力移行が進んだ。

しかし、この革命期の成果についてブヘナウは、社会的・政治的変革よりもむしろ象徴的意義が重視されたと述べている[Buchenau 2015:1-5]。ここでいう「象徴的意義」とは、メキシコ革命が具体的な社会的・政治的成果を超えて、国家や社会における変革の理想や価値観を象徴するものとして認識され、後の政治体制や国民的アイデンティティに影響を

与え続けたことを指す。特に革命に参加した下層階級のメスティーソは英雄視され、彼らの「勇気」や「犠牲」が国家建設の理想像として称賛された[Rodríguez 2013:256-258]。闘争と死が日常化していた革命期において、彼らの、死に直面した際の勇気や他者への優位性といった「男らしさ」は社会的に価値づけられた[Paredes 1971:37]。後に詳述するこの時期のメキシコ文学では、彼らについての描写が非常に多くみられ、メキシコの未来を切り開く主体として位置づけられている。この時代、マチョとしての特質は、すべての男性に求められる規範であり、それは他者の支配や女性的な弱さの否定を通じて証明されるものとされた[Paredes 1971:17-37]。こうした男らしさの感覚は、革命期のナショナリズムの高揚と密接に結びつき、愛国的英雄として称賛され、国家建設の理想像を体現する存在とされた。彼らの「男らしさ」は、死を恐れずに戦う姿勢や自己犠牲の精神と結びつき、革命期の社会的価値観として広く共有された。このような闘争とナショナリズムの高揚の中で、マチスモ的概念は単なる個人の特性を超えて、メキシコの政治的・文化的アイデンティティを象徴し、それらをつなぐ中核的な要素として機能するようになったのである[Rodríguez 2013:256-258]。

メキシコ革命期における闘争と死は、日常的な出来事として受け入れられ、その中で形成された男性性の感覚は国家イデオロギーやナショナリズムと結びついた。この「男らしさ」は、闘争における勇気や犠牲、他者に対する優位性などを含み、革命の象徴として、その後の文学や「コリード(corrido)」と呼ばれる民謡を通じて広められた[Rodríguez 2013:256-258]。メンドーサは、コリードを「変動する韻律を持つ四行詩で構成された叙事・叙情的で物語的なジャンルであり、音楽フレーズを伴って歌われ、群衆の感情を強く揺さぶる出来事を語る文学的形式」[Mendoza 1962:75]と定義している。コリードは、1930年代ごろまで大衆文化ジャンルのひとつとしてその栄光を築き、現在も伝統的な音楽形式としてメキシコ文化に深く根付いている[Simmons 1963:4]。エルナンデスは、革命期における民謡であるコリードについて、読み書きのできない当時のメキシコ人にとって「新聞」としての役割を果たし、文化的アイデンティティの形成において重要な影響力を持っていたと指摘している[Hernández 2013:38]。ここでは、実際に革命期に作られたコリードの内容を取り上げて分析する。

まず、メキシコ革命期の民衆の価値観やアイデンティティを反映したコリードのひとつである『デメトリア・ハウレギ(Demetrio Jáuregui)』の一部を取り上げる。

原文：*Le contestó Don Demetrio:*

*Yo no me vine a rajar,
yo vine como los hombres
aquí a perder o ganar⁵.*

訳文：ドン・デメトリアは答えた

「俺は戦いから逃げるために来たんじゃない。
男としてここに来たんだ、
勝つか負けるかどちらかのために。」（筆者訳）

この『デメトリオ・ハウレギ』のコリードは、主人公が戦いから逃げず、「男らしさ」を表現する姿勢を描いている。「勝つか負けるか」という表現は、覚悟と運命を受け入れる精神を象徴し、これは、革命期における男の理想像と一致する。また、「男として」という言葉は、戦いを逃げることのできない自己の責務と捉え、それを果たすことで名誉や尊厳を得ようとする意識を示している。この歌詞は、当時の社会や文化に深く根付いた価値観の一部を垣間見せる貴重なテキストである。

また、同時期のコリードである『ロス・アンビシオソス・パトネス(Los ambiciosos patones)』では、『デメトリオ・ハウレギ』のコリードよりも、より過激な、メキシコ革命期の民衆の価値観が反映されている。

原文：*Se va a mirar muy bonito de gringos el tenderete,
después no quedarán la gorda; les sudará hasta el copete.
La verdad, yo les suplico que traigan a sus gringuitas,
porque estamos enfadados de querer a las inditas,
sé que las tienen bonitas, gordas y bien coloradas.
ahora es tiempo, camaradas de pelear con muchas ganas,
que les vamos a "avanzar" hasta las americanas⁶.*

訳文：グリンゴ（アメリカ人）の死体が散らばる様子は、なんとも美しい光景になるだろう、
それで彼らはお手上げだ、
汗をびっしょりかいて怯えるだろう。
正直に言うが、俺たちは願っている、
彼らのグリンギータ（アメリカ人の若い女性）たちを連れてきてほしいと。
俺たちはインディアンの娘たちを愛するのに飽き飽きしているからな。
彼らが可愛い娘たちを持っているのは知っている、
ふつくらしていて赤みがかかった頬をしている女たちだ。
今こそ時だ、同志たちよ、
思いっきり戦う時が、
そしてアメリカの女たちにまで手を伸ばす時がな。（筆者訳）

このコリードでは、メキシコ革命期における敵であるグリンゴへの敵意、勇気の誇示、そ

して女性を戦利品のように扱う男性中心的な価値観が強く表現されていることが分かる。

一方でメンドーサは、コリードの中には各地域に特有の文化的誇張や自信の表現が取り入れられ、地域性を色濃く反映しながら、地域社会のアイデンティティや誇りの一部として受け継がれていったものも多かったと指摘している[Mendoza 1962:79-81]。例えば、グアナファト州で広がったコリードには、「俺は純粋なグアナファト生まれ、金が掘れる土地の出身だ」、「俺はグアナファト生まれ、恐れを知らない男だ」といったグアナファトという出身を強調する表現が頻繁に登場する[Mendoza 1962:80]。メンドーサはそれについて、鉱山で働く労働者たちが自分たちの出身地誇りに思い、勇敢さを示す一方で、虚勢や誇張も含まれ、それらが地域文化として洗練されることで地域住民にとってのアイデンティティの象徴となっていたと分析している[Mendoza 1962:79-81]。

また、コリード以外にもメキシコを代表する文学作品のひとつであるホセ・バスコンセロスの著作『ラ・ラサ・コスミカ(La raza cósmica)』は、メキシコ革命期のナショナリズムの高揚と結びつきながら、メスティーソを「未来を担う理想的な国民」として位置づけ、その人種的優越性を謳い上げた重要な作品である[Rodríguez 2013:256-258]。『ラ・ラサ・コスミカ』では、メスティーソが国家を変革する中心的存在として称賛され、粗野で剛健な男性性の特質がメキシコ人アイデンティティの象徴として理想化されている[Rodríguez 2013: 257]。この著作は、革命期のナショナリズムと結びつき、勇気や犠牲を「国家の未来を切り開く力」として強調しつつ、同性愛者などの「女性的」存在を排除することで、マチスモを国家の象徴へと昇華させた[Rodríguez 2013:256-258]。

このように、コリードや当時の文学作品の中では、「男らしく死ぬ」「真の男」「勇敢」「度胸がある」というようにメスティーソ男性を英雄として称す部分が多くみられる。しかし、1930 年代までは、マチスモはおろか「マチョ」やその他の派生語が一度も登場せず、hombrismo, hombría, hombre de verdad, valentía, といった語が男性性に言及するに際して採用されているという事実をパレデスは指摘している[Paredes 1971:18; 林 2004:1-11]。

以上の議論を通じて、メキシコ革命期に生まれたナショナリズムや国家建設の象徴的価値観としてのマチスモが、当時のコリードや文学作品において「勇気」や「犠牲」といった男性的特質が称賛されることによって、普遍的な文化的要素として定着していったことがわかる。

(2)大衆文化とマチスモの美化

メキシコ革命後にコリードや文学を通して普及していったマチスモは、1940 年代以降は、大衆文化、特に映画や音楽によってさらに普及していった。この時期、メキシコは産業化による経済発展の過程にあり、映画や音楽はナショナリズムを高める媒体としても利用されていた。これらの文化的表現は、マチスモを単なる男性性の表現ではなく、メキシコ的アイデンティティの象徴として定着させた。

1940 年から 1946 年のマヌエル・アビラ・カマチョ大統領政権期には「マチョ」という

言葉が登場し始める[Paredes 1971:22-23]。1940 年代にメキシコで歌われたコリードのひとつである「デ・ピストレロス・イ・モロニスタス (De Pistoleros y Moronistas)」の歌詞の最後は次のようにになっている。

原文：
¡Viva el pueblo siempre macho!

¡Agustín el general!

¡Y viva Ávila Camacho y la vida sindical!⁷

和訳：常に勇敢で誇り高き民衆よ、万歳！

将軍アグスティン万歳！

そしてアビラ・カマチョと労働組合の生活よ、万歳！（筆者訳）

この歌の中では、「マチョ」という言葉が、当時の大統領であった「アビラ・カマチョ」の名前と韻を踏んでいることが分かる。それ以前は、「マチョ」はほとんど卑猥語に近く、*hombre*(男)や *valiente*(勇敢な者)といった表現と比較して使用頻度が低かった[Paredes 1971:23]。しかし、第二次世界大戦中、メキシコは戦争にほとんど関与しなかったものの、参戦を契機に枢軸国への脅威やアメリカとの協力を賛美する歌詞が生まれ、当時の大統領の名前が「マチョ」と韻を踏むことも相まって、勇敢さを象徴する「マチョ」という言葉が国家的誇りを示すシンボルとして用いられるようになったのである[Paredes 1971:23]。1940 年代に人気があった別のコリードの中には、さらに明確にメキシコ大統領を「カ……マチョ！」と称えているものもみられる。

1940 年代の第二次世界大戦期に歌われたコリードによって普及した「マチョ」という言葉とそれが象徴する男性性は、その後、映画や音楽といった大衆文化へと受け継がれていた。特に 1930 年代後半から 1950 年代のメキシコ映画の黄金時代に登場した「チャロ (charro)」というキャラクターは、農村部の英雄的な男性像としてマチスモを体現する存在として描かれた。

映画の黄金時代は、1936 年にラサロ・カルデナス大統領が映画産業を国家政策として支援したことに始まり[Paredes 1971:18]、それ以降コリードはフォークロアから映画やほかのマスメディアへと移行した。この時代には牧場や農村(rancho)を舞台にチャロを主役として理想的なメキシコ男性像を描き出すことが特徴である「コメディア・ランチエラ (Comedia Ranchera)」という映画ジャンルが誕生した[Torres 2020:18-20]。チャロは、家族や土地を守る父権的な地主であり、女性を征服し、敵を打ち負かす英雄的な存在として描写される。このイメージは、「男らしさ」の象徴としてマチスモを美化し、広く普及させる役割を果たした。ダビッド・シルバ、ペドロ・アルメンダリス、ペドロ・インファンテやホルヘ・ネグレテはメキシコの典型的なマチョ像を示した代表的な俳優であるとされる [Monsiváis 2002:114-116]。特に、ホルヘ・ネグレテ、ペドロ・インファンテは、チャロを体現する国民的アイコンとして人気を博したという[Torres 2020:18-20]。モンシバイスは、

当時のメキシコにおいて「マチョの中のマチョ」は映画の中のホルヘ・ネグレテのように見せることであったと述べている[Monsiváis 2002:113]。例えば、ネグレテが主演した映画『メキシコ人の愛し方(Cuando Quiere Un Mexicano)』（1941年）では、彼が女性を膝に乗せて尻を叩くプロモーションポスターが話題を呼び、男性優位のジェンダー構造を強調するチャロ像が描かれた[Paredes 1971:20]。コメディア・ランチェラを通じて広められた「映画コリード」は、映画館に通い、車を所有し、銃を携帯する程度の経済力を持つ中産階級に理想的な男性像としてのチャロを強く印象付け、彼らの社会的価値観に大きな影響をもたらした[Paredes 1971:21]。また、ペドロ・インファンテが主演した、1948年の『貧しき私たち(Nosotros los Pobres)』や『富める者たち(Ustedes los Ricos)』などの作品では、農村部の小規模社会にみられる典型的な男性が演じられ、やがて都市の労働者層にも受け入れられるよう再解釈され、より幅広い層に影響を与えた[Monsiváis 2002:116; Paredes 1971:20]。こうして、黄金期の映画におけるチャロの描写は、マチスモを文化的価値観として定着させ、国民的アイデンティティの一部となったのである。

また、映画と密接に関連したマリアッチ音楽やランチェラ音楽もマチスモの普及に重要な役割を果たした。マリアッチとは、メキシコのハリスコ州に起源をもつ8~12人のメンバーで構成された音楽アンサンブルであり、メンバーはチャロスーツ(trajes de charro)や伝統的な幅広の帽子(sombrero)を着用して演奏を行う[Torres 2020:4-5]。マリアッチが演奏する音楽には複数のジャンルが含まれ、「ランチェラ音楽(música ranchera)」、「マリアッチ音楽(música de mariachi)」、「メキシコ音楽(la música mexicana)」が代表的なものとして挙げられる。加えてさらに細かいジャンルとして、「ソネス(sones)」や「コリードス(corridos)」など10種類以上が存在する[Torres 2020:6]。1940年代以降から現在に至るまで、マリアッチやランチェラ音楽をはじめとする彼らの音楽は、メキシコ社会におけるマチスモの普及において重要な役割を果たしている。ランチェラ音楽やマリアッチ音楽の多くは、男性的な勇敢さや名誉、女性への支配をテーマとしたものである。

例えば、ランチェラ音楽のひとつである1992年のアントニオ・アギラールによる“Que Se Te Quite Ese Orgullo”では、恋愛における男性の自由や軽薄な態度を強調しながら、プライドの高い女性への批判が描かれ、典型的な男性優位の態度や恋愛観が色濃く反映されている。また、コリードの代表的作品のひとつであり、1990年代に発表されたチャリーノ・サンチェスの“Baraja de Oro”には、以下のような歌詞が含まれている。

原文：Voy a jugarme un albur

Con una baraja de oro
Que si la gano ya estuvo
Y si lo pierdo ni modo
Porque yo soy de los hombres que cuando pierdo no lloro.
Las mujeres son barajas

Ayy que saber barajar
Pa saber cual es la tuya
Es la que vas apostar
No ya despues de perdido
Quiran volver a jugar⁸.

和訳：俺は命を懸けて賭けをする
黄金のトランプを使ってな
勝てばそれで十分だし
負ければ仕方がない
だって俺は、負けても泣かない男だからさ。
女たちはカードのようなもの
だからうまく切り分けなきゃいけない
自分のものにするには、賭けるカードを選ぶんだ
でも、負けた後で
もう一度プレイしたいなんて思うなよ。（筆者訳）

歌詞をみると、人生や恋愛を賭け事になぞらえることで、マチスモ文化の核心的な価値観を表現していることが分かる。「俺は負けても泣かない男だ」という歌詞はまさに、マチスモにおける感情の抑制や勇敢さの理想を表している。また、女をカードに例えるという描写にも、女性を男性が選択する対象とみなしているという点において、マチスモ的なジェンダー観を強調しているといえる。このような楽曲は、農村部や都市中間層を中心に普及したランチエラやコリードのジャンルに典型的なテーマであり、マチスモ的な価値観を社会全体に浸透させる役割を果たした[Torres 2020:6]。

さらに、マリアッチ音楽の演奏スタイル自体もまた、マチョを象徴する要素を強調している。例えば、トランペットの鋭い音色や、ビウエラやギタロンによる激しいリズムストロークは、力強さと攻撃性を象徴しており、男性的な力を聴覚的に表現している[Torres 2020:14-16]。この演奏スタイルは、音楽の内容だけでなく、楽器の扱いやパフォーマンスそのものを通じて、マチスモの美学を観客に伝える手段となった。歌詞や演奏だけでなく、マリアッチの視覚的イメージもまた、マチスモを体現している。チャロスツ（trajes de charro）やソンブレロ（sombbrero）といった衣装は、男性的な力強さと権威を視覚的に強調する役割を果たしている[Torres 2020:6]。この衣装を身にまとったマリアッチは、メキシコ男性の象徴として機能し、観客にメキシコ人の理想像としてのマチョのイメージを植え付けた[Torres 2020:6]。“Baraja de Oro”を歌ったチャリーノ・サンチエスは、1992年5月16日にメキシコ、シナロア州のクリアカンで行われたコンサート中、観客から殺害予告とみられる一通の手紙を受け取ったとされる⁹。しかし、彼はその内容に動搖することなく、

予定通りコンサートを最後まで続行したが、翌日、警察官を装った人物たちに連行され、その後遺体で発見された。この事件は、彼の楽曲が象徴するコリードの世界観と重なり、危険や困難に直面しても毅然とした態度を貫く男性像を連想させるものである。このように、マリアッチ音楽やランチュラ音楽の世界は、音楽的要素、視覚的イメージ、そしてアーティスト自身の生き様を通じて、マチスモの美学と価値観を強く反映し、聴衆に男性の理想像としてのマチョを刻み込む文化的な装置として機能した。

1940年代以降のメキシコにおいては、映画や音楽を中心とした大衆文化は、マチスモを単なる男性性の理想として描くだけでなく、メキシコ的アイデンティティを象徴する要素として広く普及させる役割を果たした。これらの文化的表現は、映画やラジオ、ライブパフォーマンスといった媒体を通じて、マチスモは階級を越えて社会全体に浸透し、「真のメキシコ性 (mexicanidad)」の象徴として国家的アイデンティティの形成に寄与した[Torres 2020:4-6; Paredes 1971:20-23]。大衆文化におけるマチスモの表象は、農村部から都市部に至るまで幅広い層に受け入れられ、映画や音楽を通じてメキシコ社会全体に浸透し、その普及を加速させる重要な役割を果たしたのである。

5. 小括

本章では、男らしさの一形態としてマチスモを位置づけたうえで、マチスモの起源、及び、メキシコ男性の理想像とする価値観が、歴史的背景と文化的表象を通じて形成され、普及されていった過程について論じた。

まず、スペインによる植民地化という歴史的コンテクストの中で、キリスト教的価値観の導入やスペイン人入植者と先住民の間にあった立場の不平等から生じた劣等感が、マチスモの形成において重要な意味を持つことを明らかにした。この過程において、西洋的価値観である家父長制的価値観が形成されたほか、劣等感こそが、ラテンアメリカ地域特有のマチスモを生み出す要因となったのである。

さらに、メキシコ革命期には、ナショナリズムの高揚とともに「勇敢さ」や「自己犠牲」が称賛される男性像が文学や民謡（コリード）を通じて象徴化され、マチスモの概念が社会に普及する契機となった。特に、革命期の文化的表象は、闘争や犠牲を通じて形成される男性性を「理想的な規範」として描き、メキシコ的アイデンティティの構築と結びつけられた。また、第二次世界大戦以降の映画や音楽といった大衆文化は、マチスモの美化と社会への浸透を後押しした。映画ではチャロという英雄的男性像が理想化され、マリアッチ音楽やランチュラ音楽を通じて男性性の価値観が視覚的・聴覚的に強調されることで、マチスモは国民的象徴としての役割を果たすようになった。このように、歴史的文脈と文化的表象の両面から、マチスモが多層的に形成され、社会のあらゆる階層に受け入れられていったプロセスが確認された。

以上の議論から、マチスモは歴史的経験と文化的表象が複合的に作用する中で形成され、社会の規範的価値として機能するに至ったといえる。

第3章 マチスモの変容と男性アイデンティティの危機

本章では、メキシコ社会における文化的規範としての「マチスモ」がどのように変容し、その変化が男性のアイデンティティ形成にどのような影響を与えていているのかを明らかにする。まず、19世紀末からメキシコで展開されたフェミニズムの各波が、ジェンダー規範の再解釈や男女平等の推進に果たした役割を概観する。次に、マチスモの象徴的価値が、かつての「勇敢さ」や「犠牲」といった肯定的なイメージから、「暴力性」や「権力性」を伴う「有毒な男性性」といった否定的なイメージに再解釈される過程を論じる。そして、ジェンダー研究の発展を背景に、メキシコにおいて、マチスモが男性に引き起こす自己不一致や心理的葛藤といったアイデンティティ形成に及ぼす影響を分析する。さらに、フェミニズム運動や女性の社会進出による急速な社会変化が、こうした男性のアイデンティティ危機を一層深刻化させている現状を検討する。この過程を通じて、現代メキシコ社会における男性のアイデンティティ危機と、その背景にあるフェミニズムの進展や社会構造の急速な変化がもたらす影響について考察する。

1. メキシコにおけるフェミニズムの進展とその意義の概観

メキシコにおいて、マチスモの再解釈が進んだ背景には、フェミニズム運動の進展が深く関わっているとされる。フェミニズムは、女性の権利拡大やジェンダー規範の再編を通じて、社会全体に大きな影響を与え、メキシコ社会を劇的に変化させた。フェミニズム運動が国内で普及する過程、そしてそれが社会にもたらしたインパクトはどのようなものであったのだろうか。ここでは、メキシコ社会におけるフェミニズムの歴史的な展開とその成果を概観し、それが社会構造の変革に与えた影響について考察する。

(1) フェミニズムの展開

メキシコでフェミニズムが体系的かつ本格的に展開されたのは、1876年から1911年にわたるポルフィリオ・ディアス政権期のことである[松久 2002:19]。メキシコのフェミニズム史は、一般的に第一波から第四波の4つの段階に分けられ、それぞれの時期において特徴的なテーマが現れ、社会の進展とともに運動の形態も多様化してきた。

19世紀末から20世紀初頭にかけて展開された第一波フェミニズムでは、女性の法的権利拡大や労働条件改善、政治参加の促進が進み女性解放運動が芽生えた[松久 2010:136-139]。中でも、1916年にはユカタン州でメキシコ初のフェミニズム会議が開催され、その後、1930年代になると多くの州議会で女性参政権が承認されるなど、男女の法的平等の基盤が築かれた[松久 2010:129,136]。

1960年代末から1990年代まで続いた第二波では、女性の労働問題や政治参加、性と生

殖の自己決定権利の確立を中心に、法制度や女性政策が進展した[松久 2010:146]。この時期には、1974 年の憲法 4 条改正で男女平等が明文化され、1975 年にはメキシコシティで第 1 回世界女性会議が開催されるなど、女性運動の基盤が整備された[国本 2015:252]。また、女性学やジェンダー研究が新たに生まれ、学術分野として発展を遂げた[松久 2010:128]。

1990 年代以降から 2000 年代初頭にかけての第三波では、多様化と大衆化を特徴とし、インターフェクショナリティ理論¹⁰ やラディカル・フェミニズム¹¹ の影響を受けつつ発展した[Castillo 2024:39-41]。全国的に「個人的なことは政治的なこと ("lo personal es político")」のスローガンのもと、ジェンダー暴力や家庭内の権力関係の問題を社会的に認識させ、女性間の連帯を強化した[Castillo 2024:39-41]。また、1994 年のサパティスタ蜂起¹² は、多様な女性が参加する民衆運動の象徴的事例として挙げられる[国本 2000:252]。さらに、2006 年以降には「男女平等法」や「女性が暴力のない生活を送る権利に関する一般法」などの法制度が整備され、2009 年のメキシコシティにおける同性婚の合法化を含む社会的・政治的変革が推進された[Castillo 2024:39-41; 国本 2015:252]。

2010 年代に始まる第四波フェミニズムでは、SNS を活用したオンライン活動とデモやストライキなどのオンライン活動が融合し、新たな運動形態が広がった[Cerva 2020:200-201]。2016 年の「紫の春¹³ (Primavera Violeta)」では、フェミサイド¹⁴ (女性殺害) への抗議として大規模デモが行われ、社会全体の関心を引き付ける契機となった[Rovira 2021:146]。この運動は、2015 年にアルゼンチンで始まった "#NiUnaMenos"¹⁵ (もう一人も犠牲にしない) の影響を受け、メキシコでは「ハッシュタグフェミニズム」として発展し、多くの女性が SNS を通じて不平等や暴力への抗議を発信した[Rovira 2021:146]。さらに、アメリカ発の「#MeToo 運動」がメキシコにも波及し、職場や学校での性的暴力の告発が増加したと同時に、SNS を通じた抗議活動が大衆化した[Cerva 2020:186]。これによりフェミニズムは個々の主張を超え、社会全体の構造的な課題に切り込む政治的運動へと深化したのである。

以上を踏まえると、メキシコにおけるフェミニズム運動は、第一波から第四波まで大きく規模を拡大したとともに、社会に膨大な影響を及ぼしてきたことが分かる。特に、第四波では SNS を駆使した活動が広がり、女性の声が大きくなったことで、フェミニズムは個人の問題を超えて、社会全体の構造的な課題に切り込む政治的運動へと進化したのである。

(2) フェミニズムの成果

第一波から現在に至るフェミニズム運動は、メキシコの社会構造の変革において法的、社会的、文化的に広範な影響をもたらしてきた。その成果は、教育、雇用機会、政治といった具体的な分野で顕著に表れている。

メキシコにおける女性の教育水準は各段階で男性と同等、またはそれ以上に達し、特に高等教育では進学率・卒業率ともに女性が男性を上回るようになった[OECD 2023]。この

教育の進展は、女性の専門職・管理職への進出を後押しし、メキシコ労働法における産休や授乳時間の保障、保育サービスの提供といった労働環境の整備と相まって、女性の社会進出を支える基盤となっている[Benítez 2018:123; 国本 2015:20-21]。

政治分野では、1953年の女性参政権の成立後、1993年のジェンダー・クオーター制¹導入により、女性の政治参加が大幅に進展した[国本 2015:252]。1999年にはメキシコシティに初の女性市長が誕生し[国本 2015:252]、2024年にはクラウディア・シェインバウムがメキシコ初の女性大統領に選出され、女性の政治的リーダーシップが社会に浸透していることが示された。さらに、ジェンダー平等を推進するため2001年には、女性の権利を保護し実質的な平等を達成することを目的に、メキシコ政府により国際女性機関(INMUJERES)が設立された[国本 2015:252]。また、2007年には「女性に対する暴力撤廃法」が施行され、フェミサイドが独立した犯罪として定義され、通常の殺人事件より重い刑罰が科されるようになど、法的枠組みが強化されてきた[国本 2015:252]。これにより、性暴力や性差別に対する社会的意識の変化が進み、セクハラ防止の制度や通報システムの導入が加速している。

文化的領域では、映画、音楽、デジタルメディアがジェンダー規範の再編に寄与している。『Roma』をはじめとする現代メキシコ映画において、社会経済的格差とともにジェンダー不平等が描写されている。また、音楽ではモン・ラフェルテやカレン・メンデスをはじめとする多くのアーティストが女性の権利やジェンダー暴力をテーマにした楽曲を発表し、若年層を中心に大きな影響を与えていている。例えば、2019年にリリースされたメキシコを拠点に活動する歌手モン・ラフェルテの、男性中心の権力構造への批判について歌った“Plata Ta Tá”的 YouTube のミュージックビデオはこれまでに約3000万回再生されている¹⁷。これらは若年層を中心にジェンダー意識の変化を促している。また、YouTubeやTikTokなどのデジタルメディアでは、ジェンダー規範を風刺的に描くコンテンツが広く共有され、特に都市部において新たなジェンダー観の形成を後押ししている。

以上を踏まえると、メキシコのフェミニズム運動は、教育や法整備、文化表現を通じて男女平等の実現に向けた重要な基盤を築いたことが分かる。教育や労働、政治といった具体的な分野で女性の地位向上が達成されただけでなく、映画や音楽、デジタルメディアなどの文化的表現を通じて、ジェンダー規範や男性優位の価値観を批判的に見直す動きが広がったことは、フェミニズムが社会全体に浸透しつつあることを示している。このような変化は、メキシコ社会が法的に男女平等を実現しただけでなく、その価値観が日常生活や社会的意識の中に根付いていることを示し、社会構造の変革における歴史的な意義を持つと評価できる。

2. ジェンダー研究の発展とマチスモの変容

(1) ジェンダー研究の発展と男性性の再考

今まで続くジェンダー研究は、フェミニズムの発展と密接に関係している。綾部は、

人類学におけるジェンダーの議論に関して、「ジェンダーの議論は 1970 年代、第二波フェミニズムの影響の下ではじまったという点で異論はないだろう」[綾部 2006:231]と指摘している。後のジェンダー研究に先駆的な貢献をしたのがマーガレット・ミードである。ミードは、『男性と女性』(1949 年) の中で、ニューギニアの 3 つの文化を比較し、それをアメリカの男女の特徴と対比させることで、男らしさや女らしさの規範が文化によって多様であることを明らかにした[ミード 1961]。1980 年代に入るまで、「ジェンダー」という言葉は主に「女性」の類語として用いられており、ジェンダー研究は女性が男性から受けた被害者性を取り上げる議論が中心であった[ナサンソン 2016:29]。大学の「ジェンダー」科目も、女性を家父長的価値観から解放することを目的としており、男性について言及されることはあっても、専らジェンダー問題を引き起こした主体として扱われていた[ナサンソン 2016:29]。また、カスタニエーダは「男性性そのものが『自然で普遍的なもの』として暗黙のうちに捉えられていたことも、この遅れを助長する要因となった」[Castañeda 2019:83]と述べている。1980 年代に入ると、ジェンダーが女性だけでなく、社会や文化全体の体系として捉えられるようになり、人類学においてその概念が定着していった[綾部 2006:236-237]。この時期には、ジェンダーをテーマとした多くの良質な民族誌が生み出されるとともに、フェミニスト人類学者たちも、女性の地位を問題視する枠組みから、ジェンダー全体を論じるアプローチへと移行していった[綾部 2006:236-237]。

メキシコにおいても、ジェンダー研究の枠組みの中で男性性に焦点を当てた研究が本格的に行われるようになったのは、比較的最近のことである[Castañeda 2019:83]。後に詳しく取り上げる 1934 年の『メキシコ人とは何か』の中で、ラモスがメキシコの男性性について論じたことは、マチスモを学術的に考察した初期の例として注目される。しかし、マチスモを体系的に分析し、再解釈する動きが本格化したのは、20 世紀後半から 21 世紀にかけてのジェンダー研究の進展以降である。

このように、フェミニズム運動に伴うジェンダー研究の発展は、男性性を文化的・社会的文脈の中で捉え直し、メキシコにおけるマチスモの理解にも新たな視座を提供する重要な契機となった。

(2)マチスモの再解釈

第 2 章では、メキシコ革命後の文学や大衆文化を通して、「マチョ」が「勇気」や「犠牲」といった国家建設の象徴的価値観として称賛され、普及していった過程について考察した。しかし、1930 年代以降、その価値観は徐々に批判的に再解釈されるようになる。パレデスは、1930 年を本物の民族的コリードの終焉とし、それまで国家建設の象徴として称賛されてきた「男らしさ」が、悲劇的かつ否定的なメキシコ男性特有の特徴として議論され始めたと指摘している[Paredes 1971:37]。こうした転換期において、サムエル・ラモスやオクタビオ・パスといった知識人たちは、メキシコの男性性を「支配的な枠組みの起源」として批判的に分析し、それが社会的不平等や抑圧構造の一因であると捉える視点を提示した

[ラモス 1934; パス 1947]。ラモスやパスの批判的再解釈は、男性性の称賛からその負の側面への注目へと議論を大きく転換させ、メキシコ男性性の象徴的意味を再定義する契機となった。

ラモスは著書『メキシコ人とは何か』[ラモス 1934]で、「マチョ」という概念を初めて学術的に用い、マチョを「暴力的で無礼、虚勢を張る存在」と定義し、それを国民的劣等感の表れとして精神分析的に考察した。ラモスは、アドラーの自我心理学を基盤に、マチョが国家建設期の英雄像から逸脱し、病的な誇張へと変質したことを強調している[ラモス 1980:59-73]。

さらに、パスは 1947 年の『孤独の迷宮』[パス 1947]において、メキシコの男性性を孤独と結びつけ、「恣意的で抑制のない暴力」を体現するものであると捉えた[パス 1984:207]。彼は、マチョの行動が自己を破壊し、周囲に孤立を生むものとして批判し、それをメキシコ社会全体の病理として位置づけた。また、パスはメキシコ男性の内向的な孤独が、他者との関係や自己との対話を阻む一因であると論じた[パス 1984:216-217]。このように、ラモスとパスは、それまで称賛されてきた男性性を、メキシコ人特有の社会的・心理的問題の象徴として再解釈し、批判的な視点を提示したのである。

これらの批判的視点を受け、マチスモは社会的不平等や文化的抑圧の象徴として再解釈されるようになったが、同時にそれはメキシコ文化の核を形成する要素としても残存した。こうした視点は、オスター・パトリックによる分析にも引き継がれている。オスターは、『メキシコ人』において、「90%がいくぶんかのインディオの血を引く現代メキシコ男性は、屈辱や裏切りの恐怖を背景に、脆い男らしさを隠す仮面として冷酷な態度を身につけ、その結果、他者を傷つける行動に走る傾向がある」[オスター 1992:387]と指摘する。オスターはまた、メキシコのマチスモがほかのラテンアメリカ諸国と比較して独自の特徴を持つことを強調している。ラテンアメリカの多くの国では、マチスモは「己の名誉を守るために最善をつくすこと」を意味する一方で、メキシコではそれ以上に「裏切りへの不安と苦痛に耐える能力」に関係しているという[オスター 1992:331]。

オスターは、メキシコ社会における男性の暴力、残忍さ、死に対する独特の姿勢、虚栄心、ブラックユーモア、アルコール依存、そして「やられる前にやってやろう」という攻撃的な行動がマチスモとして表れ、それがメキシコ社会全体に深く根付いていると指摘する[オスター 1992:384]。マチスモの影響が顕著にみられる例として、家庭内における抑圧的構造が挙げられる。メキシコ国立統計地理情報院(INEGI) の統計によると、2021 年時点で、メキシコにおいて 15 歳以上の女性の 70.1%が、生涯のうちに心理的、経済的、財産的、身体的、性的な暴力や差別のいずれかを経験したことがあるという¹⁸。さらに、メキシコにおいて、夫による妻や子どもに対する暴言、殴打など家庭内暴力の訴えは非常に多く、2020 年 10 月から 2021 年 10 月の 1 年間に、15 歳以上の女性のうち 11.4%がいずれかの形で家庭内暴力を経験しているという¹⁹。オスターは、「メキシコ人女性は幼少期から男性より劣る存在として扱われることを強要され、夫による暴力や性的強要を『人生の運命』

として受け入れる文化的背景の中で生きている」[オスター 1992:383-384]と指摘する。

以上の議論を通じて、かつては国家建設の象徴として称賛されたマチスモが、1930年代以降、ラモスやパスらの批判的視点の登場によって、その象徴的価値が徐々に再解釈されるようになり、劣等感や孤独感、さらには社会的不平等や抑圧構造を反映する負の側面が強調されるに至ったことがわかる。これにより、マチスモは単なる男性性の象徴から、メキシコ社会に深く根付いた文化的・社会的課題を象徴するものへと変容したのである。

3. マチスモと男性のアイデンティティ危機

これまで論じてきたように、1930年以降、メキシコ社会においてマチスモは再解釈され、その権力性、暴力性、さらにはマジョリティ性が批判的に捉えられるようになった。このような視点に基づき、マチスモを排除すべきであるとの立場から多くの男性論が展開されてきた。しかし、近年では文化的規範としてのマチスモが男性自身に与える影響についても注目が集まり始めており、特に2000年代以降、ジェンダー研究の中で議論されることが増えている[e.g. Castañeda 2019; ジャブロンカ 2024; Valdez 2023など]。これらの研究は、マチスモの規範が男性のアイデンティティ形成に及ぼす深刻な影響を指摘している。ここでは、アイデンティティの概念とその形成過程におけるジェンダー規範の影響を整理する。さらに、ヒギンスが提唱した自己不一致理論をもとに、マチスモがメキシコ男性に引き起こすアイデンティティ危機について考察する。

(1) アイデンティティ形成とジェンダー規範

「アイデンティティ」という用語を体系的に使用し、その理論を発達させたのは、発達心理学者のエリック・エリクソンである。エリクソンは『幼児期と社会』(1992)の中で、アイデンティティという概念について以下のように説明している。

自我同一性（アイデンティティ）の観念は、過去において準備された内的な斉一性と連続性とが、他人に対する自分の存在の意味—「職業」という実体的な契約に明示されているような自分の存在の意味—の斉一性と連続性に一致すると思う自身の積み重ねである[エリクソン 1992:336]。

このエリクソンの定義から、アイデンティティとは外の世界との関わり方、すなわち外部からの自分に対する評価と自分自身の内面的な欲求や感情との調和を図ることで「自分がどのような人間であるか」という感覚を形成することであると言える。エリクソンは、安定した自意識はこの2つがうまく釣り合ったときに達成され、この調和がとれないと「もはや自分が誰か分からぬ状態」である「アイデンティティの危機」が生じると指摘した[エリクソン 1992:40-51]。アイデンティティ形成は特に思春期において顕著であり、この時期に個人は文化的期待や社会的規範に向き合いながら自己の輪郭を確立していく。

アイデンティティ形成において、ジェンダー規範は、多様な社会的文脈において許容される行動を明確に区別する機能を持つ、強力な社会的カテゴリー規範の一例である[Stanaland 2023:359]。人々は生まれたときから、「男の子」または「女の子」というジェンダーグループに割り当てられ、そのグループに沿った行動が期待される。スタナランドは、ジェンダー規範のうち「男性性」に関する規範は特に厳格かつ永続的であり、多くの男の子が3歳という幼い歳から男性性の規範を学び内面化すると指摘している[Stanaland 2023:360]。男性アイデンティティの構築においても思春期は非常に重要な段階であり、この段階で若者は自分に求められる男性的役割に同一化し、社会環境の規範に基づいて「男らしさ」を学ぶ[Castañeda 2019:72]。多くの場合、男性性の規範に従う圧力は中学校の時点で既に存在し、ステレオタイプ的な男性的行動に従うよう求められる[Castañeda 2019:72; Stanaland 2023:360]。スタナランドは、これらの早期の圧力は、10代の少年たちが男性性を証明し、他者の行動を規制するために、ホモフォビックな言葉、性差別的な中傷、身体的な暴力を使用することと関連していると主張した[Stanaland 2023:361]。さらに、このような厳格な男性性規範の適応に関連する圧力は、成人期にも持続し、男性の不安、攻撃性、性的暴行、および社会的・政治的偏見といった悪影響と関連しているという[Stanaland 2023:361]。

しかし、社会的期待が厳格であればあるほど、個人は自己と外部からの期待との間で深刻な葛藤を経験することがある[Stanaland 2023:360]。特にマチスモは、その中核的な価値観として「勇敢さ」や「自己犠牲」といった要素が含まれる厳格な男性性規範である。このようなマチスモ文化の中では、「泣かない」「強くあれ」といった規範を内面化することで、常に自らの男性性を証明し続けなければならないプレッシャーにさらされ、多くの男性が心理的な不一致やストレスを抱えやすい状況に置かれている[ジャブロンカ 2024:221]。

このような状況は、男性が自己のアイデンティティを確立する過程で大きな障壁となり、彼らの心理的な安定性に深刻な影響を与える。結果として、マチスモによるプレッシャーは、男性が自らの感情や欲求を抑圧し、社会的期待に適応することを強いる一方で、アイデンティティの危機や心理的葛藤を引き起こす原因となる。

(2) 自己不一致に苦しむ男性

ヒギンスが提唱した「自己不一致理論 (Self-Discrepancy Theory)」[Higgins 1987]は、男性が直面するアイデンティティ危機について説明する上で有用な理論的枠組みである。この理論では、自己は「実際の自己 (actual-self)」、「義務の自己 (ought-self)」、「理想の自己 (ideal-self)」の3つに分けられる[Higgins 1987:319]。

「実際の自己」とは、個人が自身に備わっていると信じる特性、すなわち「自分が何者であるか」を指す概念である[Higgins 1987:320-321]。スタナランドはこの概念を男性性に当てはめ、男性性の文脈においては、少年や男性の実際の自己は、彼らの本来のジェンダー表現を構成する特性や行動に該当するとしている[Stanaland 2023:363]。つまり、実際

の自己は、社会的期待が介在しない環境において、少年や男性が本来示すとされる行動によって形成される。一方「義務の自己」とは、個人が他者から期待されていると認識する特性を指し、「自分があるべき姿」を構成する概念である[Higgins 1987:320-321]。男性性の文脈においては、少年や男性が社会的規範や期待に基づき、持つべきと感じる特性や行動を表し、この義務の自己は外部からの期待に強く影響される[Stanaland 2023:363]。また、「理想の自己」とは、個人が自身に対して抱く理想像、すなわち「自分がなりたい姿」を指す概念である[Higgins 1987:320-321]。男性性の文脈においては、理想の自己は、自らの目標や願望に基づき、持ちたいと感じる特性や行動を表し、外部の期待ではなく内発的な動機に依拠して形成される[Stanaland 2023:363]。ヒギンスは、「実際の自己」と「義務の自己」あるいは「理想の自己」との間に不一致が生じることにより、自己不一致が発生すると述べている[Higgins 1987:322]。

まず、実際の自己と義務の自己との間に不一致が生じる場合、個人は社会的義務や期待を満たせていないと認識し、それが心理的苦痛を引き起こすとされる[Higgins 1987:322]。この不一致は、いじめやからかいといった他者からの制裁に繋がり、さらに、外部の期待に応じて行動する外発的同調動機を生み出すという[Higgins 1987:322]。ジンバルドーは、幼少期から「男の子はタフであるべき」という考え方や「強い男性像」を内面化させられることで、少年たちは感情表現を抑圧する可能性があることを指摘している[ジンバルドー 2017:234-245]。その影響は成人期に顕在化し、恋愛や親密な関係において、自己理解の欠如や感情の未熟さが原因で相手の感情的なニーズに応えられず、結果として関係が深まらないだけでなく、コミュニケーションの希薄さや疎外感を引き起こす[ジンバルドー 2017:234-245]。厳格な男性性規範であるメキシコにおけるマチスモの文脈では、この不一致が特に顕著であり、メキシコ人の男性は、自らの男として地位が脅かされたと感じると、攻撃性や性差別的態度といった外向的反応(externalized responses)を通じて男性性を再主張しようとする[Stanaland 2023:363]。このような外向的反応には、暴力や性差別といった他者に焦点を当てた行動が含まれ、補償的な機能を果たすと考えられている[Stanaland 2023:363]。メキシコ男性の、妻やパートナーに対する暴力、フェミサイド、ホモフォビア、女性蔑視や性的対象化は、厳格な男性性規範であるマチスモに基づく外向的反応の一例であり、男性が社会的期待や役割を維持するための補償的行動として顕在化するものであると考えられる。

一方で、実際の自己と理想の自己との間に不一致が生じる場合、個人は自己の理想像に近づくための内面的な目標を追求する傾向があるとされる[Higgins 1987:322]。しかし、この不一致は、不安や恥、自傷行為といった内向的反応(internalized responses)を引き起こす可能性がある[Stanaland 2023:363]。これらの内向的反応は、外向的反応のように他者に向けた補償的な役割を果たすわけではないが、男性性が脅かされた際に生じる異なる心理的な反応の仕組みを示している[Stanaland 2023:361]。メキシコにおける、男性の心理的孤立、社会的に「真の男」と見なされないことへの恐れや劣等感から生じる抑うつや不安、

自己嫌悪は、内向的反応の例として挙げられよう。さらに、内向的反応はアルコール依存や薬物依存といった形で表れることがあり、さらに深刻化すると自殺といった極端な結果につながることもある[ジャブロンカ 2024:234]。

(3) 自らに向けられる暴力

以上の自己不一致理論を踏まえると、メキシコにおける「マチスモ」という厳格な男性規範は、メキシコ男性に自己不一致を引き起こし、結果としてアイデンティティの危機や心理的葛藤をもたらす要因となりえるといえる。メキシコのマチスモ社会における男性の自己不一致という文脈において、メキシコの少年や若者たちが経験する過酷さは、他者に対する暴力としての外向的反応、自らに対する暴力としての内向的反応として現れる。

ジャブロンカは、このような暴力のうち、注目されることが前者だけに過ぎないという現状を問題視し、19世紀以降、男性は女性よりも早く、より残酷な形で死ぬことを指摘している[ジャブロンカ 2024:234]。例えば、世界保健機関(WHO)の統計によると、2021年には日本では女性が男性よりも5.5年長く生き、南北アメリカ全体ではその差が6.0年に達している²⁰ことから、男性の平均寿命の短さが浮き彫りとなっている。メキシコでは隔たりがより大きく、2021年時点で女性が男性を7.5年も上回った²¹。ジャブロンカは、男性の寿命の短さの原因は、喫煙、アルコール依存症、貧弱な食事だけではなく、職場での事故、精神疾患、暴力、危険な行動、医師やセラピストの診察の忌避も原因になっていると主張している[ジャブロンカ 2024:234]。また、ジンバルドーは「男につきものの基本的な社会的不安感は彼らにとって非常に大きな重圧なので、あまりに多くの男たちが精神的に崩壊して邪悪な行いや英雄的な行動に走り、結局、女性より早く死ぬのも不思議ではない。」[ジンバルドー 2017:195-196]と述べている。

男性の寿命の短さに加えて、世界中で男性の自殺率が女性よりも高いことも深刻な問題である。WHOの統計によると、2019年時点での人口10万人当たりの自殺者数は、日本では男性17.5人、女性9.2人と男性の自殺率は女性のそれより約2倍高い。一方、メキシコでは、男性8.7人、女性2.2人と男性の方が女性よりも約4倍も多く自殺している²²。また、男性が自殺する場合はより暴力的な方法(首吊りや銃器)を用いており、女性の場合よりも成功率が高いという[ジャブロンカ 2024:235]。これは、死の間際においてさえ、力、決断力、合理性、勇気といった男性が持つとされる資質を示そうとする行為である[ジャブロンカ 2024:235]。メキシコ男性が幼少期からおかれれるマチスモ社会は、彼らに男らしくあること、仕事への過度の熱中、不平を慎み、感情を表さないことを強いる。その結果、男性の暴力は他者に対してのみならず、内向的反応として自分自身に向けられるのである。このような、男性が子どものころから与えられてきた強力な社会規範であるマチスモがもたらす苦しみは、男性の平均寿命の短さや男性の自殺率の高さに表れていることが分かる。

以上を踏まえると、1930年代以降、マチスモは長らく男性優位の文化的規範として批判されてきたが、実際には男性自身もその強力な規範に縛られ、アイデンティティの危機に

直面していることが分かる。しかし、マチスモによって多くの男性が自己不一致に苦しんでいる現状は、現代メキシコ社会においてほとんど認識されていない[ジャブロンカ 2024:236]。このような状況が見過ごされている事実は、この問題が抱える根深さ、そして深刻さを一層明確にしている。

4.アイデンティティ危機の深刻化

(1) 伝統と変化の狭間で深まる男性の危機

前節では、厳格なジェンダー規範であるマチスモは、多くのメキシコ男性に理想と現実の乖離から生じる自己不一致を引き起こし、彼らのアイデンティティ形成に深刻な影響を及ぼしてきたことを論じた。マチスモ社会がメキシコ男性にもたらすプレッシャーや、そこから生じる心理的葛藤は、彼らを危機的な状況へと追い込む要因となっている。さらに近年、このような男性の危機的状況がフェミニズムの進展、女性の社会進出、そしてそれに伴う社会の急速な変化によって一層深刻化している点が指摘されるようになった。

林は、メキシコ男性のアイデンティティ危機について「男性アイデンティティの危機の根幹にあるのは、女性の世紀末、新世紀におけるラディカルな変化である」[林 2004:7-8]と述べている。また、ジャブロンカとナサンソンは、男性の疎外感は、男性中心主義がポピュラーカルチャーやエリートカルチャーにおいて女性中心主義に置き換わり、さらに女性の解放が進む中で深刻さを増し、ほとんど劇的なレベルにまで達していることを指摘している[ジャブロンカ 2024:220; ナサンソン 2016:25]。メキシコ国内でフェミニズム運動が進展する中で、従来の家父長制的な社会秩序が揺らぎ、現代社会においては、男性がその中で築いてきた価値観や役割が再定義を迫られている[ジャブロンカ 2024:9]。現代メキシコ社会においては、ジェンダー研究の中でマチスモが頻繁に非難され、権威的な父親は、彼をからかう10代の子どもたち、収入を得る働く妻、自分の命令に疑問を抱く部下に直面している[Castañeda 2019:29]。現代社会の変化に伴い男性は、家父長制社会から抜けることを選ぶことはできるが、軽蔑、地位の喪失、ほかの男と同等でないことへの非難といった代償を払わざるを得ないことをジャブロンカは指摘する[ジャブロンカ 2024:19]。社会における男性の役割のアップデートが切実に求められているにもかかわらず、ジンバルドーが「主夫は負け犬とみなされ、『いい人』はもてない」[ジンバルドー 2017:12]と主張するように、男性にとって新たな役割を受け入れることは、依然として社会的偏見や否定的評価に直面する困難な道である。また、このような現実に対して誰もが彼に我慢するように言い聞かせるため、仕事中の事故や早い消耗、ストレス、燃え尽きなど彼の肉体や心が代償として壊れていくことの深刻さをジャブロンカは強調している[ジャブロンカ 2024:19]。

このような状況は、女性の社会的領域の拡張に伴う急速な社会変化に対し、男性が適応しきれていない現実を浮き彫りにしている。今日のメキシコ社会においては、かつてと比較して多くの女性が働き、キャリアを形成し、自分の性的行動を選択する。このように、社会が男性よりも早いスピードで変化し、女性の領域が信じられないほど拡大したことに

対して、男性の領域は広がらず、かつてのマチスモ的習慣を捨てきれぬまま社会的な激変と変化に抵抗しているのである。また、従来のマチスモ的規範においてメキシコ男性は、家父長的な地位を通じて社会的ステータスを確保してきたが、現代社会においてその価値観は大きく非難され、もはや支配的ではなくなりつつある[Castañeda 2019:29]。その一方で、ジャブロンカが指摘するように、フェミニストが要求する現代的価値観に基づく「新しい男性像」を受け入れることは、男らしさという社会的地位、そして自らのアイデンティティをも見失うことにつながり、多くの男性にとっては容易な選択肢ではない。このようなメキシコの現代社会における「伝統的なマチスモ的価値観」と「現代的な価値観」の板挟み状態は、多くの男性に深刻な心理的葛藤をもたらしているのである。

(2) 抑圧される男性の声

これまで論じてきたように、現代メキシコ社会において、男性が直面しているアイデンティティ危機は、従来のマチスモ的価値観と現代的価値観への適応という、相反する圧力の中ですますます深刻化している。このような状況において、男性が抱える問題はしばしば見過ごされ、社会的な認識や支援が不足している。ナサンソンは、女性の社会進出が進む中で、現代メキシコ社会における男性に対するステレオタイプ的なナンセンスや政治的なレトリックは、多くの人々が今や男性を実際の人間として考えることさえ難しく感じていると指摘している[ナサンソン 2016: 24]。近年、「逆差別」や「男性嫌悪」という言葉は国をまたいで多くの国で耳にするようになっているが、メキシコ社会における女性の男性に対する嫌悪は、他国と比較しても顕著であり、極めて強い傾向を示している。メキシコにおいて男性を責めることはフェミニズム団体では常識になっている[ナサンソン 2016: 29,105]。先述したように、現代メキシコ社会においては、多くのメキシコ男性がアイデンティティの危機に瀕している。しかし、彼らが「ジェンダー」というトピックで焦点を当てられたとしても、それは「ジェンダーの問題を作り出した張本人」としての役割に限定され、個人としての視点や具体的な課題が議論の中心に据えられることはほとんどない。現代メキシコ社会における男性像に対する思い込みは、男性が社会のすべての悪の原因であり、歴史的な「集合的原罪」に基づいて罰せられるべき存在とされる一方、女性は「集合的被害者性」に基づいて補償されるべき存在と見なされるという構造に基づいている[ナサンソン 2016:29]。このような認識は、手段を問わず結果を正当化し、集合的利益が個人の権利を上回るとする偏った価値観を支えている[ナサンソン 2016:29]。ジャブロンカは「全ての男性が暴君であるとは限らないように、男性を支配する男性性だけに還元することはできない」[ジャブロンカ 2024:220]とすべての男性を敵対視する現代社会を非難している。

またナサンソンは、男性に対する批判的な言説や社会的思い込みの結果、男性が抱える問題に対する社会的認識が欠如していることを指摘している。現代メキシコ社会において男性の声は抑圧され、自己の問題を表明することは許されず、彼らの苦悩は「見えないも

の」として扱われている[ナサンソン 2016:26-28]。ジンバルドーは、このような男性の課題が軽視される現状について、男性が直面する危機に対応するための運動や組織的な支援がほとんど存在しない点を問題視している[ジンバルドー 2017:9]。現代メキシコ社会において、多くの若い女性たちはフェミニズム運動を通じて自己表現や権利の主張を行う場を得ている一方で、男性に対する包括的な支援や連帯を目的とした運動はほとんど存在せず、彼らの声が集約される機会は極めて限られている[ジャブロンカ 2024:236]。女性運動のような体系的な枠組みが欠如しているため、男性が自己の課題を表明し、社会的な解決策を模索する場がないのである。

以上を踏まえると、フェミニズム運動によって大きく変わったメキシコの現代社会において、男性が声を上げることが許されない社会的風潮が存在していることがわかる。さらに、自己の課題を表明し解決を模索するための社会的な場や支援が欠如していることが、男性のアイデンティティ危機をさらに悪化させているといえる。

5. 小括

本章では、メキシコ社会における「マチスモ」という文化的規範が、フェミニズムによる社会的パラダイムシフトを受けてどのように変容し、それが男性のアイデンティティ形成にいかなる影響を及ぼしているのかを論じた。

19世紀末から展開されたフェミニズム運動の各波が、ジェンダー規範の再解釈や男女平等の推進に果たした役割を概観した。また、それによりマチスモの象徴的価値が、「勇敢さ」や「自己犠牲」といった肯定的な概念から、劣等感や孤独から生じる「暴力性」や「権力性」を伴う否定的な概念へと徐々に変容していった過程を明らかにした。

さらに、フェミニズムの影響で発展したジェンダー研究の中でも男性性に関する研究や心理学の理論を通じて、厳格な男性性規範であるマチスモが男性に自己不一致を引き起こし、それが心理的葛藤やストレスの源泉となっていることが示されている。この自己不一致は、暴力や性差別的態度といった外向的な行動に加え、抑うつや自己嫌悪、さらにはアルコール依存や自殺といった内向的な形で具体化している。

また、近年のフェミニズム運動や女性の社会進出は、従来の家父長的な社会秩序を揺るがし、男性に新たな価値観や役割の再定義を迫る一方で、これまで支配的だったマチスモ的規範との板挟みを生む状況を引き起こしている。その結果、メキシコ男性が直面するアイデンティティの危機は、劇的なレベルに達している。加えて、現代メキシコ社会において、女性の権利が拡大する一方で、男性の課題は「見えないもの」として扱われ、彼らの声に耳を傾けられることは皆無と言っていいほどないのが現状である。フェミニズムが女性の自己表現や権利向上を支援する中で、男性が直面する困難は十分に議論されることなく、軽視され続けているのである。

以上のように、現代メキシコ社会における、フェミニズムによる社会変化とマチスモの変容は、男性に新たな自己定義と社会的役割の模索を迫りながら、彼らの自己不一致や心

理的葛藤をさらに深刻化させている。したがって、このような男性が直面する危機に対して、性別を問わず、真剣に向き合うべきであり、彼らの声を聞くことが必要である。したがって、第4章では、メキシコ、グアダラハラの大学生男女12名に対して筆者が行ったインタビューを通じて、マチスモがメキシコにおける若年世代の男性のアイデンティティ形成にどのような影響を与えていているのかを具体的に考察する。

第4章 グアダラハラの若者が語るマチスモと男性のアイデンティティ形成

1. インタビュー概要と調査対象者のプロフィール

筆者は、2022年8月から2023年7月、2024年9月から同年10月にメキシコのグアダラハラに滞在していた際に、現地で参与観察、また2024年12月に、グアダラハラの男女大学生を対象としたインタビュー調査を実施した。インタビューは、グアダラハラ大学に通う12人の現役大学生（男性8人、女性4人）に対してスペイン語を用いて行った。また、グアダラハラ大学からの交換留学生2名とは筑波大学構内にて対面で、その他の大学生10人とはZOOMによるオンラインインタビューを行った。本研究では、プライバシー保護の観点からインタビュー対象者の実名は使用せず、全員に仮名を付与して記述することとする。なお、調査者のプロフィールは以下の通りである。

表1 調査対象者のプロフィール

| 名前 | 年齢 | 性別 | 出身地 | 専攻 |
|--------|----|----|------------------|-------|
| ルナ | 27 | 男 | ハリスコ州グアダラハラ | 国際関係学 |
| ラウール | 26 | 男 | ハリスコ州グアダラハラ | 化学 |
| チャバ | 29 | 男 | ナジャリ州バイア・デ・バンデラス | 舞踊学 |
| アレックス | 24 | 男 | ハリスコ州グアダラハラ | 外国語学 |
| ブライアン | 25 | 男 | ハリスコ州グアダラハラ | 国際関係学 |
| ミロ | 21 | 男 | ハリスコ州グスマン市 | 医学 |
| フェルナンド | 21 | 男 | ハリスコ州グアダラハラ | 物理工学 |
| フレディ | 24 | 男 | ハリスコ州エル・グルージョ | 化学 |
| ダニエラ | 23 | 女 | ハリスコ州グアダラハラ | 国際関係学 |
| マリア | 22 | 女 | ハリスコ州グアダラハラ | 国際関係学 |
| エレナ | 22 | 女 | ベラクルス州コルドバ | 国際関係学 |
| ウェンディ | 21 | 女 | ハリスコ州グアダラハラ | 教育学 |

なお、「マチスモが男性のアイデンティティ形成に与える影響」に対する女子大学生の認識を取り入れることで、男性の語りだけでは見えにくい側面や、男女間の認識の違いを

明らかにすることを目的として、女子大学生にもインタビュー調査を実施した。

本研究では、あらかじめ用意された質問項目を基盤としつつ、対象者の自由な語りを引き出すことを目的として、半構造化インタビューを実施した。第1章で述べたように、グアダラハラは伝統と現代性が交錯する、独特な社会的環境を持つ都市である。このような背景の中で、マチスモがグアダラハラの男子大学生のアイデンティティ形成にどのように影響し、それが彼らの人生にどのような形で反映されているのかを、本章では具体的に検討していく。

2. 高等教育と若者の「マチスモ」観

マチスモがグアダラハラの男子大学生のアイデンティティ形成に与える影響に関する語りを取り上げるにあたり、まず前提として「大学生」という彼らの特徴に注目する。ここでは、高等教育という特別な学びの場に身を置く彼らが、マチスモにどのように向き合い、その概念をどのように解釈しているのかについて、彼ら自身の語りを通じて具体的に明らかにする。

(1) 高等教育とマチスモの実態

インタビューを通じて、調査対象者である大学生たちが「マチスモ」について一定の知識を持っていることがわかった。彼らの多くは、高等教育を通じてジェンダー問題への理解が深まり、教育機会の少ない人々に比べてリテラシーが向上していると感じていることを語った。筆者が調査対象者12人全員に「小学校から高校までの間、授業でジェンダーやマチスモに関する話を聞いた経験があるか」と質問したところ、全員が「高校卒業までそのようなテーマが授業で扱われたことはなかった」といった趣旨の発言をした。彼らがジェンダーに関する知識を得たのは、もっぱら大学進学後であるという。

例えば、グアダラハラ大学の人文社会系のキャンパスに通う女子大学生のダニエラは、次のように語った。

筆者：「メキシコで高等教育を受けている人たちは、フェミニズムやマチスモについて学ぶ機会がありますか？」

ダニエラ：「はい。少なくとも私が通うキャンパスでは間違いなくそういう機会があります。例えば、国際女性の日の翌日、3月9日には女子大学生が登校を控えるという抗議活動が行われますが、そのとき男子大学生は大学に行きます。その日は、大学で男性同士、なぜこの抗議を考慮することが重要なのかについて、話し合う場が設けられます。」

ダニエラの語りから、彼女が通うキャンパスではジェンダー問題への理解を深めるための具体的な取り組みが行われていることがわかる。特に、国際女性の日をきっかけにした男

子大学生の議論の場は、マチスモやフェミニズムといったテーマについて男性が主体的に考えるきっかけを提供しているといえる。

一方でミロは、男子大学生の視点から次のように語った。

ミロ：「大学では、自分と同じようなレベルの人たちと関わるので、多くの人が自分の知性について気づかされるのです。僕自身もそうでした。高校生の時までは、クラスの中で頭がいいことで目立っていましたが、大学では『性別関係なくみんな同じくらい賢い』という現実に直面しました。男性大学生の中には、女子大学生より自分の方が頭が良いと思っていた人もいましたが、教室が女子でいっぱいです。しかもその中に自分より賢い女子がいることに直面するわけです。それが現実への目覚めになることもあります。さらに大学では、マチスモやフェミニズムについて真剣に議論する機会があります。」

一方で、ルナは教育の影響について踏み込んで、大学での学びが自身の価値観や考え方などにどのように影響を与えたかを次のように語った。

筆者：「高等教育を受けられる立場にあることで、マチスモに対する認識が、そうでない人々と異なっていると思いますか？」

ルナ：「はい、そうだと思います。マチスモや男性性、フェミニズムに関するることはすべて大学で学びました。友人たちとの会話や授業、または自分で調べて学んだものです。教育を受ける、そして大学という開けたコミュニティで新たな価値観に触れることで、こうした話題を受け入れやすくなり、新しいアイデアを探求する姿勢が生まれます。一方で、このような機会を得られなかった多くの人々はいつも同じ人々と仕事をし、同じ環境にいることで新しい考え方につれようとせず、『自分の生き方はこれで正しい』と考え、それを変えようとしません。」

このように、高等教育を受けることで、ジェンダーとマチスモが引き起こす問題について学び、自らの価値観を見つめ直す機会を得られるという意見がある一方で、大学という高等教育機関においてもマチスモが存在するという指摘もあった。インタビューに参加した女子大学生たちは、大学という高等教育の場においてさえ、性差別を経験することができる語った。ウェンディは、学生間でマチスモ的な発言や行動が頻繁に見られると指摘し、特に女子大学生の外見や私生活に対する批判的なコメントが多いと述べた。また、教授の中にも男子学生には注意をしない一方で、女子学生に対してのみ厳しく指導し、低く評価する男性教授がいることを明らかにした。同様にダニエラは、男子学生が「女子にはこの分野は向いていない」といった趣旨の発言をし、女子学生の能力を女性だからという

理由だけで過小評価しようとする態度をとる場面を経験したと語った。

一方で、理系キャンパスに通う男子大学生のラウールは、グアダラハラ大学におけるマチスモについて言及し、学歴の有無が個々人のマチスモ的価値観の強さに直接結びつくわけではないと語った。

ラウール：「個人のマチスモ的価値観の強さが必ずしも学歴に関係しているとは僕は思いません。強いマチスモ的価値観を持つ人は高等教育を受けていても、受けていなくてもいます。というのも、僕のキャンパスで出会った学生の多くが女子学生に対して差別的な考えを持っていました。彼らは、人文社会系の学部は女性向けだと思っているし、『頭が悪い人向け』というふうに考えています。こうした考えが普通だと思っているみたいです。また、物理や数学といった理系の授業の中では、教授は女子学生に質問することを避ける傾向にありました。先生たちは『ああ、この子は答えられないだろうな』と思っているようでした。また、成績が良い女子学生について、男子学生が『教授に媚でも売ったのだろう』と噂することも頻繁にあります。」

以上の語りを通じて、大学という高等教育の場がジェンダーやマチスモについて学ぶ機会を提供し、グアダラハラの大学生が「マチスモ」に関して一定の知識を有する一方で、その内部にも依然としてマチスモ的な価値観や行動が残っている現状が浮かび上がる。ダニエラやウェンディの語りからは、大学内の女性に対する不当な評価や差別的な態度がいまだに根深いことが分かった。また、ラウールの指摘は、大学以上の学歴の有無にかかわらず、マチスモ的価値観が一部の学生や教授に浸透していることを示しており、大学が持つ先進的な役割と同時に課題を抱える現実を映し出している。

(2) 「マチョ」とは誰か

第3章では、マチスモの象徴的価値が、「勇敢さ」や「自己犠牲」といった肯定的な概念から、男性性が再解釈されたことにより、「暴力性」や「権力性」を伴う否定的な概念へと徐々に変容していった過程を明らかにした。本インタビュー調査では、グアダラハラの男女大学生12人全員が「マチョ」という言葉を否定的に捉えていることが明らかになった。ただし、「マチョ」や「マチスモ」に対する否定的な認識は共通しているものの、その言葉の解釈には大きなばらつきが見られた。まず、過半数の学生は「マチョ」を攻撃性や抑圧的な態度と結び付けていた。

例えば、ブライアンは次のように述べている。

ブライアン：「昔からメキシコでは『マチョ』というのは、強くて男らしい、家族を守る力のある人というイメージでした。でも、僕にとっては否定的な意味

合いが強いです。現代では『マチョ』は、家庭内で自分が優位に立ち、特定の権利を持っていると感じ、それによって他の家族、特に女性を軽視する人のように見えます。社会全体でも、女性を抑圧する存在として否定的に捉えられています。」

ブライアンの発言から、「マチョ」に対する解釈が、伝統的な家族を守る理想像から、現代では女性を軽視し家庭内で優位に立つ存在として否定的に捉えられていることがわかる。また、このような「マチョ」のイメージは、家庭内のみならず社会全体においても女性を抑圧する否定的な意味合いを帯びていると彼は指摘している。

一方で、以下のように、「マチョ」や「マチスモ」を社会的規範や文化としてとらえる意見も見られた。

ルナ：「『マチスモ』はメキシコの男性に関連付けられています。歴史的な背景があって、男性が畠で働いたり戦争に行ったりする役割を担っていたからだと思います。一方で、女性は家庭を守る存在とされていました。に僕にとって『マチョ』とは、男性が従うべきだとされるイメージのようなものです。理想像というよりは、社会的な規範のようなものです。」

ルナは、「マチスモ」を、男性が従うべき社会的な規範として捉えている。その背景には、歴史的な役割分担があり、男性が外で働き、女性が家庭を守るという伝統的な構図が影響していると指摘した。一方、ウェンディやエレナは文化と関連付けて定義した。

ウェンディ：「『マチョ』とは、非常に男らしい男性のステレオタイプを指していると思います。そして『マチスモ』は、そういった男性に注目が集まり、彼らが家庭や社会の中心であると考えられる文化的傾向のことです。その結果、女性が軽視されることにつながると思います。」

エレナ：「『マチョ』という言葉は、女性に対して暴力的な行動を取る男性という意味です。一方、『マチスモ』は、メキシコの男性文化において理想とされる行動を表しています。マチスモは行動だけでなく信念も含まれており、最終的な目的は女性や少女の生活を支配し、暴力を振るうことだと考えられます。」

ウェンディとエレナの発言からは、「マチスモ」が男性優位を正当化し、女性を軽視、支配する文化的構造を含んでいることがうかがえる。特に、彼女たちは「マチスモ」が単なる行動や態度ではなく、信念や社会的規範として深く根付いている点を強調している。

エレナとウェンディを含む女子大学生4人全員が、「マチスモ」を女性に対する暴力性

や抑圧的態度と関連付けて定義した一方で、興味深いことに、男子大学生8人中4人が、「マチョ」を否定的に解釈しつつも、次のようにある種の魅力や優越感と関連づけて語った。

チャバ：「『マチョ』のイメージは、身体的に強く、感情を表に出さず、どちらかといえば暴力的で、ある種魅力的である人だと思います。『マチスモ』というのは、男性の姿を美化する傾向を指すものだと思います。『マチョ』とは、家事や子どもの世話をしないで外で働き、家族を養う役割を担う人であり、そして、浮気をする傾向があるとも言えます。」

ミロ：「僕にとって『マチョ』は、ある意味で勇気と結びついていると思います。力強さと荒々しさを兼ね備えた男性像です。でも、それは僕が目指したいと思うマチョ像に限った話です。一方で、僕が目指したくない『マチョ』もいます。それは例えば女たらしだったり、道を外れて『自分は他人より賢い』とか『自分は優れている』と感じているようなタイプ。そういう優越感を持った人たちもマチョと言えるかもしれないけれど、僕はそういうのは目指したくありません。」

このように、本インタビューでは、「マチョ」や「マチスモ」に対する解釈が否定的である点では男女学生に共通していたが、その具体的な解釈には多様性が見られた。中でも女子学生は主に、これらを女性に対する暴力性や抑圧的態度と関連付けて捉えていた。一方、男子学生の一部は、「マチョ」に否定的な側面を認めつつも、勇気や力強さといった肯定的な要素や、ある種の魅力を伴う男性像として捉える傾向があった。このように、グアダラハラの若者の解釈には、性別や個々人による違いがみられた。

3. 日常のマチスモと若い男性のアイデンティティ形成

第3章では、マチスモがメキシコ男性にアイデンティティ危機をもたらしている現実をマクロな視点から論じた。一方、ここではグアダラハラの大学生たちの語りに基づき、マチスモによる影響をどのように経験し、それが自らのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしてきたのかをミクロな視点から掘り下げる。インタビューの中で彼らは、家庭環境や学校生活、恋愛や性的な期待といったさまざまな文脈を通じて、マチスモ的規範がどのように再生産され、若者の価値観や行動に影響を与えていたかについて語った。

(1)語られない苦しみ

筆者は、調査対象の大学生全員に対して、「フェミサイドなど、マチスモが女性に与える影響がよく話題にされる一方で、男性に対しても、強さや感情を抑えることを求めるなど

の負の影響を与えていていると思うか」と質問した。その結果、12人全員が、マチスモは女性に深刻な影響を及ぼすだけでなく、男性にも何らかの形で負の影響を与えてているとの認識を示した。しかし、全員がこの認識を共有しているにもかかわらず、「男性もマチスモの被害者である」という考えは、メキシコではまだ一般的とは言えないという。彼らは、ジェンダーに関して非常にオープンな都市であるグアダラハラでさえ、男性が自らの苦しみを他者と共有したり、それについて公に語ったりする機会が非常に限られていると語った。その理由について、ミロは「男性もマチスモで苦しむ」という考え方自体を、多くの男性が信じようとしないことを挙げている。

ミロ：「僕は、男性も間違なくマチスモによって苦しめられていると思います。ただ、多くのメキシコ人男性は、マチスモに苦しめられているという事実に気づいていないと思います。こうした意見を述べる人もいますが、大半の男性はそれを信じません。『マチスモで苦しむ』という話を、『男らしさを手放させるための嘘だ』と捉えてしまうんです。」

筆者：「ただ、実際には多くの男性がマチスモ的規範に苦しめられているんですよ？」

ミロ：「その通りです、苦しんでいます。しかし、彼らは『苦しむのは良いことだ』と考えています。『苦しむことは、自分がなりたい人物像になるための代償だ』と信じているのです。だから、もし誰かが『その苦しみを取り除いてあげる』と言ったとしても、『自分の目標を奪おうとしている』と感じてしまうのです。つまり、彼らは『男らしさ』という幻想を信じ込み、それを守るために苦しみさえも受け入れているのです。」

ミロの語りは、メキシコにおける「男らしさ」の社会的規範が、男性自身の苦しみを不可視化する構造を持っていることを示唆している。

一方ブライアンは、自らがマチスモの被害者であるという考え方を持つメキシコ男性は少ないしながらも、「もろい男性性」というテーマについて数少ない回数ではあるものの、話したことがあると語った。

筆者：「メキシコでは、自らもマチスモの被害者であるという考え方を持っている男性はどのくらいいると思いますか？」

ブライアン：「それは一部だと思います。マチスモによる影響を、社会的なプレッシャーによるものと考える人がとても多いです。」

筆者：「なるほど。男性が直面する危機についてクラスメートや友人と話したことはありますか？」

ブライアン：「はい、何度かありますが、多くはありません。主に『もろい男性性

(masculinidad frágil)』についてです。たとえば、『そんなことするなんて男らしくないね』といった『男らしさ』に触れる冗談を言うと、それがジョークだったとしてもすぐに怒る男性がいます。そんなテーマについて話したことがあります。」

インタビューの結果、調査対象者たちは、メキシコの男性がマチスモによって苦しんでいる現実を認めながらも、その事実が社会的に広く認識されていない現状を語った。また、当事者である男性自身がその苦しみに気づいていないケースも多いことが明らかになった。その背景には、「男らしさ」を実現するための代償として苦しみを受け入れる文化的な要因があることが、彼らの語りから読み取れる。さらに、ジェンダーに関して比較的オープンとされるグアダラハラの大学生でさえ、マチスモについて男性の視点から議論する機会はほとんどないという現状が語られた。このことから、男性がマチスモの影響を受けているという認識が、現代の若者の間でも十分に浸透していないことが示唆される。

(2)父親が与える影響

本インタビューでは、調査対象者 12 人のうち 10 人が、自らの父親を自分たちが定義する「マチョ」に該当すると認識しており、家庭内での父親像が自身のアイデンティティ形成に大きな影響を与えてきたと語った。父親を「マチョ」に当てはめる理由として、家庭内での支配的な態度、性別役割の固定化、暴力や攻撃性が挙げられており、自らの父親ながら、多くの学生がそのような父親の振る舞いを批判的に捉えていた。

例えば、ブライアンは「父は非常に攻撃的で、怒鳴ることや暴力を振るうことが日常的だった。」と語り、家庭内での攻撃的、暴力的な態度を強調した。また、ウェンディは「父は女性が男性と同じ役割を果たせるとは考えていない。」と述べ、性別役割に固執する姿勢をマチスモの一例として挙げている。さらに、マリアは「父親は基本的に料理を作ったり皿を洗ったりと家事を手伝うことはなく、それは無意識に行われる『ミクロマチスモ』だ。」と指摘した。つまり、父親の家庭内での行動は一見してマチスモ的ではないように思われるものの、マチスモ的価値観では母親がるべきとされている役割を避けているという点において、日常生活の中でミクロなマチスモ的価値観が再生産されているという。一方、フレディは父親についてある程度は「マチョ」に当てはまるし、父親が友人関係の中で「男らしさ」を基準に行動し、他の男性と競い合うことで自身の男らしさを確立していると述べた。

またラウールは、自身の父親が非常に厳しく接してきたため、家にいることがあまり好きではなかったと述べ、父親について次のように語った。

筆者：「大人になる過程で、あなたのアイデンティティ形成に最も影響を与えたのは誰だと思いますか？」

ラウール：「やはり父の影響が大きかったと思います。父は子ども時代や高校時代に、私に多くの不安感を与えました。その影響は今でも残っています。例えば、高校生の時には、父の影響で女の子に対しての自信を失ったこともあります。『男なら同時にたくさんの彼女を持つべきだ』と言われたことはプレッシャーになっていました。ただし、『同じ学校や職場ではダメだ』と言われました。『場所を分けろ』と。『たとえば学校で一人、職場で一人、自宅近くで一人、遠くにもう一人』みたいに。」

筆者：「なるほど。他にも記憶に残っていることはありますか？」

ラウール：「『男なら文句を言うな』と直接言われたわけではありませんが、暗黙の了解のようなものはありました。私は文句を言わなかっただけでし、『これはできない』と言ったこともありませんでした。ただ、やらなければならぬことがありますれば、『やるしかない』と思っていましたし、そもそも家庭内で僕に選択肢なんてありませんでした。『やらない』と考えることさえありませんでしたよ。」

ラウールの語りからは、父親の価値観や行動が彼の性格や日々の判断にどのように影響を与えたかが具体的に伝わってくる。父親からの期待やプレッシャーにより、自らの意思よりも指示や暗黙の了解に従うことが習慣となり、それが彼の生き方や人間関係に反映されている様子がうかがえる。また、他の学生の語りにも共通して、家庭内の父親の役割や行動が、彼らの考え方や価値観に強く影響を及ぼしていることが示されている。

(3) マチスモ的規範としてのサッカー

本インタビューを通じて、調査対象者である大学生たちが繰り返し口にしたキーワードのひとつが「サッカー」だった。メキシコで最も人気のあるスポーツであるサッカーは、文化や日常生活に深く根付いている。筆者が滞在していた期間中、地元グアダラハラのクラブチーム「チバス」が国内リーグの決勝に進出した際、街全体が熱狂に包まれた。男性たちがバスの上に登り、チームの旗を掲げて歓声を上げるなど、その情熱が街中で鮮明に表れていた。メキシコにおける青少年期において、スポーツ、特にサッカーは男子生徒の評価や社会的地位に大きく関わっているという。

インタビューでは、多くの学生が、幼少期から学校生活を通じてサッカーが男子の「人気」や「尊敬」を得るために重要な手段であったと述べている。特に小中学校では、サッカーが上手いことが、成績の良さよりも周囲から高く評価される傾向があるという。例えばルナは小中学校を通して成績が良く最高評価である 10 を取っていたものの、誰からも評価されず、サッカーが上手な同級生に対して羨ましさを抱くこともあったと語った。

筆者：「小学校時代にサッカーが上手な同級生のようになりたいと思ったことはあり

ましたか？」

ルナ：「はい、彼らが遊んでいるのを見ると、羨ましいと思うこともありました。特に、サッカーの試合をしていた時です。みんなが集まって、リーダーが『この子を選ぶ、あの子を選ぶ』と言ってチームを作ります。そして僕はいつも最後に選ばれていきました。もし僕がもっと上手にプレイできて、他の子たちのようになれたら、『仕方ないからルナを選ぶ』と思われることもなかつたと思います。」

このように、ルナがサッカーが上手な同級生に対して羨ましさを抱いていた一方で、チャバやミロは、サッカーが得意でないことでからかいやいじめの対象になった経験を語った。チャバは、自らの小学生時代について、創造力があり、賢くておしゃべりな子どもだったと振り返り、「男の子ならサッカーをしなければならない」というマチスモ的固定観念に苦しめられた過去を語った。

チャバ：「私は小学生の時サッカーをしていなかったんですが、それが原因でいじめられました。サッカーをしないだけで『女の子みたい』とか『ゲイだ』と言われたりしました。休み時間になると、男の子たちはみんなサッカーをしに行くのに、私は興味がなく、残っている女の子たちと仲良くなりました。それが理由で、いじめの対象になりました。当時は『男の子ならサッカーをしなければならない』という、非常に画一的な考え方がありました。男の子はこれをすべき、女の子はこれをすべき、というような強く固定化された役割が存在していたのです。」

チャバの語りからは、小学校時代のサッカーが男子児童の間で強い規範として存在していたことがわかる。

チャバと同様にミロも、幼少期に自らの運動能力や体型を周りと比較し、劣等感を感じたことがあったという。ミロはグアダラハラ大学で医学を専攻する非常に優秀な学生である。しかし、ルナと同様に高校を卒業するまでその賢さが周囲から評価されることはなく、むしろ自らの運動能力の低さに対してコンプレックスを抱いていたという。

彼らの語りから、小学校から高校にかけて、スポーツが男子生徒の人気や友人関係の形成において重要な役割を果たしていたことが明らかになった。特にサッカーはメキシコで最も重視されるスポーツであり、そのスキルが他人からのみならず自分自身の評価に大きな影響を与えていていることが彼らの言葉から分かる。

調査対象者である女子学生たちも、小中学校時代において男子の人気がサッカーをはじめとするスポーツの能力に大きく依存していたことを語った。例えば、マリアは「小学校で女子に最も人気があったのは、足が速くスポーツが得意な子だった」と述べている。ま

た、ウェンディは「スポーツをしていた男子が最も人気だったが、彼らには責任感がなく、勉強もあまり得意ではなかった」と指摘した。一方、エレナは女子大学生の間でも、ジムに通ったりスポーツが得意な男性が人気を集めると述べ、自身の理想の男性像のひとつとして「筋肉質な男性」を挙げている。

このように、彼らの語りからは、メキシコにおいてサッカーが単なる遊びや競技にとどまらず、「男性性」や「社会的ステータス」と深く結びついた存在であるほか、異性からの評価においても重要であることが浮かび上がる。

(4) 若年期に課される恋愛と性的経験

調査対象者である大学生たちが思春期の経験について語る中で、若い年齢から恋愛や性的な経験に対して求められる社会的な期待について多くの発言があった。男子大学生 8 人中 7 人は、メキシコにおいて男性が早い段階から女性との関係や性的な経験を求められる社会的なプレッシャーを感じていたと述べた。ルナは、中学生の頃にはすでに、スポーツが得意であることに加え、彼氏や彼女がいること自体が一種のステータスとして評価されていたと語った。また、ミロは、思春期において恋愛や性的な経験が男性らしさの指標として強く求められる状況を体験したことについて語った。

筆者：「人生を振り返ってみて、社会が男性に求める期待やプレッシャー、それに伴う困難を感じたことはありますか？」

ミロ：「中学生の時のことがですが、クラスメートの何人かはいつも『彼女を作るのがどれだけ簡単か』といったことを自慢し、時には女の子を物のように扱ったり、悪く言ったりすることさえありました。あと、15 歳の時に『まだ童貞なの？まだ性体験ないの？』と聞かれて、とても驚いたことを覚えています。『僕は全然そういうことに興味がないよ』と言うと、『えっ、それじゃあゲイなの？』とか言われることもありました。違うんですけどね。」

ミロの話からは、若い男性に対する恋愛や性的な経験を求める期待が、彼自身に驚きや戸惑いをもたらしたと同時に、そのような関心が薄い自分が周囲から一方的な評価や先入観を受ける要因となってしまったことが分かる。同じようなプレッシャーを感じていたのは彼だけではなく、ラウールもまた、メキシコ社会における男らしさの基準に苦しんできたひとりである。彼は、性的経験や結婚に関する期待の強さ、またそれに反する場合に受けた偏見について次のように語っている。

ラウール：「10 代前半には女性と性的関係を持つ若者は本当に多いです。僕は 17 歳の時に初めて性的関係を女性と持ちましたが、それでも周囲と比較したら遅い方でした。中学生、高校生の時には父親も含めて周囲の知り合いの男性

には自分がゲイであることを疑われ続けました。メキシコでは結婚するのもとても早く、独身である僕に今でも父親は『本当はゲイなのではないか』と聞いてくることがあります。また、高校生の頃は女性経験について、経験がないにも関わらず『すでに10人以上と関係を持ったことがある』と自慢するなど、見え透いた嘘をつく友達も多くいました。」

彼らの語りから、現代のメキシコ社会では、10代の少年に性的早熟や恋愛の成功が求められる一方、それに応えられない者には厳しい目が向けられ、その結果、苦しむ若者がいるという現状が浮かび上がった。

4. マチスモ的規範に囚われた若い男性の苦しみ

前節では、マチスモがグアダラハラの男子大学生たちのアイデンティティ形成にどのような負の影響を及ぼしてきたかを、彼らの語りを通じて見てきた。ここでは、その結果として形成された彼らのアイデンティティが、彼らの感情表現や人間関係に及ぼす影響についての語りを取り上げる。

(1) 涙を隠す若者

本インタビューでは、「男は泣くべきではない」という典型的なマチスモ的価値観に関するエピソードが多く語られた。この価値観が、家庭や社会での生活を通じて内面化され、男性の感情表現や自己認識に影響を与えていたことがうかがえた。特に、幼少期に「泣くな」と教え込まれた経験や、感情を抑えることが「男らしさ」の一部として求められたことが、彼らの語りの中で繰り返し述べられている。

例えばミロは、幼少期に教え込まれた「男なら泣くな」という価値観に対して、現在は間違っていると思いつつも、今もなお自身に染みついてしまっているという。

ミロ：「今ではそう思いませんが、以前はすごく『男は泣くべきではない』という価値観の影響を受けていました。正直言って、今でも感情を表現するのが難しいです。というのも、幼い頃に、男性が感情を表現すると嘲笑されることが普通だったので、なるべく抑え込むようにしていたからです。」

筆者：「では子どものころ、例えば学校などで、人前で泣いたことはなかったのですか？」

ミロ：「悲しみで泣いたことはないですね。せいぜい小学校時代に怒りで泣いたことがあるくらいです。最近では映画を見て泣いたことがあります、それもひとりでいる時です。今では特に公共の場では泣くことが非常に難しいです。」

筆者：「それは誰かに『人前で泣いてはいけない』と教えられたからですか？」

ミロ：「特に祖父母からですね。当時はそれが当たり前でしたし、今でも彼らはそう

考えています。『男らしくしろ、泣くな』という価値観です。子どもの頃、僕たちはそれを教え込まれ、多くの場合、その価値観を自分たちの間でさらに強化してきました。」

筆者：「今では、その考えは変わりましたか？」

ミロ：「今ではその考えは信じていませんが、それでも無意識のうちに頭に染み付いていて、自分を抑えてしまいます。」

ミロの語りからは、幼少期に「男は泣くべきではない」という価値観が家庭内で繰り返し教え込まれ、それが彼の感情表現に深く影響を与えたことが読み取れる。特に、祖父母からの教えや同年代との交流を通じてその価値観が強化された結果、感情を抑えることが日常的な行動として内面化されている様子が浮かび上がっている。

一方、ゲイとしての性自認を持つ男子大学生のフレディは、人前で涙を流すことはないと語っており、その背景には父親から受けた教えの影響があるという。

筆者：「恋人との別れやペットの死といった非常に悲しい出来事が起きたとしたら、何としても人前で泣くのを避けると思いますか？」

フレディ：「はい、そうすると思います。僕には『つらいときは泣く』という概念、その方法が教えられなかったからだと思います。たとえば、ショックで何もできなくなる時がありますよね。その感覚と似ています。何をどうしたらいいか分からなくなるんです。だから内心すごく悲しいのに笑ってしまったりすることもあります。」

筆者：「それは、親しい人の前でも同様ですか？」

フレディ：「はい。たとえば、パートナーのオスマンは僕が泣いているのを一度も見たことがないと思います。もしかしたら一度くらい、涙が一筋流れたことはあったかもしれません、本当に感情を爆発させて泣いたことはありません。それは僕自身が許していないからです。僕にとって感情を解放して泣くというのは、とても難しいことです。」

筆者：「どのようなことがきっかけで、人前で泣くことを避けるようになったと思いますか？」。

フレディ：「僕の父の哲学が大きな影響を与えていると思います。父は常に『悲しむな、幸せでいろ』と言います。例えば、何か緊急事態が起きても『落ち着け、大丈夫だ』と言ってくれます。でも、それが適切な対応ではない時でも同じなんです。それは『男は泣くべきではない』という価値観と強く結びついているんだと思います。例えば、子どもの頃にこう言わされました。『もしお前が泣くなら、何か泣く理由を与えてやる』と。例えば、僕が叱られて泣いた時、父に『泣き止まないなら、叩いて泣く理由を与えるぞ』と言わ

れました。だから『じゃあ、泣くのをやめた方がいいな』と思ったんです。実際、本当に叩かれることもありました。僕はそういう環境で育ったし、こうした父の哲学が僕の在り方に影響していると思います。それが原因で、涙を流すということは僕にとってとても難しいことなのです。というのも、『感情を見せたら何か攻撃されるのでは』と思ってしまうから。』

フレディの語りからは、父親の教えが彼の感情表現に大きな影響を与えていていることが分かる。幼少期から「男は泣くべきではない」という価値観を厳しく教え込まれた結果、涙を流すことが難しいと感じるようになり、その価値観が彼の日常的な行動にも影響を及ぼしている様子がうかがえる。また、感情を表に出すことが攻撃を招く可能性があるという考えが、彼の中で深く根付いている点も印象的である。

一方で、自分が泣くことには抵抗があつても、他人が感情を表現することに対しては寛容な姿勢を示す者も多かった。ラウールは、自分は絶対に人前で泣かないとしつつも、ほかの男性が泣くことに関しては問題がないと語った。

ラウール：「僕は人前では絶対に泣きません。100パーセント泣かないです。」

筆者：「それはどうしてですか？」

ラウール：「だって、男は泣かないものですから。」

筆者：「本当に？泣きたくなることもないのですか？」

ラウール：「ないですね。悲しいときは一人で泣きます。元カノの前でさえ涙を流した記憶はありません。」

筆者：「『男は泣いてはいけない』という考え方方は誰から教わったのですか？」

ラウール：「うーん、誰かに教えられたわけではないです。生まれたときからそうなので。」

筆者：「なるほど。それでは、例えば友人やお父さんが涙を見せたらどう思いますか？」

それを見て男として失格であると内心感じると思いますか？」

ラウール：「いいえ、それは思いません。私は泣きませんが、他人が泣いているのは別に気にしません。ハグをして話を聞くと思います。」

インタビューに参加した男子大学生全員が、ラウールと同様に、他の男性が泣くのは問題ないとした。

これらの語りから、「男は泣くべきではない」という価値観がグアダラハラの男子大学生たちの感情表現に大きな影響を与えている様子がうかがえた。また、自分自身が人前で泣くことに抵抗を感じる一方で、他人が泣くことについては許容する意見が多く見られた。こうした語りは、彼らが感情を表現することに対して抱える複雑な態度を示している。

(2)孤独からの逃避

現代メキシコ社会では、「男性は不満を言うべきではない」「男性は弱音を吐いてはいけない」という概念は一般的なものである。インタビューにおいて調査対象者の男子大学生は、強さや忍耐力を求められ、感情を抑え込むことが美德とされるメキシコ社会で、自らの孤独や悲しみを他者に打ち明けることの難しさを語った。そして彼らに話を聞く中で、その解決方法として、様々な逃避的手段が用いられていることが分かった。例えばフレディは次のように語った。

筆者：「孤独や悲しみといった個人的な問題について、信頼してそれを共有できる人はいますか？」

フレディ：「まず『正直に話せる人』はいないと感じます。そういう問題が自分にとつてあまりにも重荷になった時に初めて、信頼できる誰かに相談することを考えると思います。というのも、男性として僕たちは問題を自分で解決するよう教えられてきました。自分の感情を他人と共有することも難しいし、それを聞いてくれる人を見つけることも難しいです。これは僕自身がマチスモ的な社会で育った影響だと思います。そして、今もその影響を強く受けています。マチスモ的な価値観では『泣くな、弱音を吐くな、お前は丈夫だ、ビールでも飲んで元気出せ』という感じです。」

筆者：「では、孤独や悲しみを抱えた時、普段どのように解決していますか？」

フレディ：「僕は通常、悲しいときには眠ります。それである程度は落ち着くし、リラックスできます。また、マリファナを吸うこともあります。それも一種の対処法として、です。アルコールで酔うのと似ています。最近は悲しい時やストレスが溜まっている時に利用します。」

フレディの語りは、メキシコ社会における男性の孤独感やその対処法を如実に物語っている。また、ルナも日常的に孤独を感じているものの、アニメに頼ることで自らの孤独と向き合うことができたという。

ルナ：「つらい時は、フィクションに頼ります。アニメを観たり、物語に没頭したりします。アニメや漫画、小説などの登場人物から、今の自分は影響を受けています。」

筆者：「具体的に教えてもらえますか？」

ルナ：「エヴァンゲリオンのキャラクターですね。実際に主人公の胸に描かれている『01』と同じタトゥーを入れています。主人公と僕の間には似たようなものがあると思っているので。エヴァンゲリオン自体はとても暗い内容なんですが、その中でも、『自分はまだこの世界で価値がある、だから頑張りたい』といっ

た気持ちを与えてくれるんです。まず、自分はひとりではないんだ、そして自分が感じていることは間違っていないんだと思わせてくれました。その上で、『たとえ自分が落ち込んでいても、問題があっても、自分は前に進み続けることができるし、成長できる』と教えてくれました。』

ルナもまた、自身の孤独感を他者に共有することの難しさを感じているが、フィクションの世界を通じてその感情と向き合う手段を見出している。これまでのインタビューで明らかになったように、調査対象者であるグアダラハラの男子大学生の中には、孤独を抱えながらも、それを他者に打ち明けることに困難を感じている人が多かった。ラウールの語りは、こうした状況をさらに具体的に示している。

ラウール：「僕はいつも自分が孤独であるように感じます。父親には『弱音を吐かないように』と本当に厳しく育てられてきました。同性の友人とも基本的には当たり障りのない会話しかしません。例えば、失恋をしたときも同性に話すとそれを話のネタにして笑われたり、『ビールでも飲めば忘れるさ』と言われたりして、まともな会話はできないと分かっていたので結局誰にも打ち明けませんでした。逆に、僕の親友が6年間付き合っていた彼女と別れた時も、自分にそれを打ち明けてくれたのは別れてから3か月たった時でした。男同士だとよくあることです。」

筆者：「孤独を感じるときはどのように対処していますか。」

ラウール：「お酒を大量に飲んだり、筋トレをしたりするようにしています。あと、ビデオゲームをしたりですかね。そういうことをすることで、一時的に孤独やつらさを紛らわせることができます。ただ、孤独を紛らわせようと思ってそういうことをしたというよりは、無意識的な行動で、それが孤独の結果としての行動だったと気づいたのは本当に最近のことです。」

ラウールが、飲酒や筋トレ、ビデオゲームといった無意識の行動が孤独感を反映していることに気づいた過程は、メキシコ男性が感情を外に出せず、その孤独感を自ら処理しようとする姿を具体的に示している。また、彼の語りからは、メキシコにおける男性間の関係における感情共有の困難さが浮き彫りとなる。これについては、ブライアンやアレックスも言及している。ブライアンは、基本的に自らの個人的な話を家族や身近な友人に共有することはなく、重要な問題があるときは、Facebookを通じて知り合った二人の親しい女性の友人に相談することが多いと語った。アニメの投稿をきっかけに友達申請を受け、長年にわたるやり取りを続けてきたという。その友人たちとは実際に会ったことはないものの、ビデオ通話や電話を通じて深い信頼関係を築いており、困ったときにはすぐに助けを求める存在だと話している。また、アレックスは、悲しい時やつらいことがあったときは、

彼の二人の姉にまずは相談するという。

インタビューでは、グアダラハラの男子大学生たちが、孤独や悲しみを抱えながらも、それを他者に打ち明けることに困難を感じている様子が明らかになった。多くの参加者が、感情を外に出さずに処理することを求められる環境で育った影響を語り、それに起因する孤独感やストレスへの対処として、飲酒、薬物、アニメへの没頭、筋トレ、ビデオゲームといった逃避的な手段を用いていることがわかった。また、相談相手として同性ではなく、女性の友人や姉妹に頼るケースがあることも特徴的であった。

(3)直面するコミュニケーションの壁

調査対象者であるグアダラハラの大学生へのインタビューでは、彼らが感情を表現することの難しさが、恋人や友人との関係にどのような影響を及ぼしているかが語られた。感情を相手に伝えることが苦手な男性たちは、その結果、誤解やすれ違いを生じさせ、関係性に悪影響を及ぼしてしまうことがあるという。

ラウールは、自身が精神的に苦しい時期に「ひとりで考えたい」という気持ちを恋人に伝えられず、その結果、別れを告げられた経験を振り返っている。

ラウール：「以前付き合っていた彼女がいて、当時色々精神的につらいことがあり、彼女との関係性について少しひとりで考えたいと思った時がありました。その時に、僕は自分がどうしたらいいのか分からなくなって彼女に連絡を取るのをいったんやめたのですが、その後、彼女は僕が別れたいと思って連絡を絶ったと一方的に解釈してしまい、別れを告げられてしまいました。実際のところ、僕は彼女と別れたいと思っていたわけではなかったのですが。僕がちゃんと、『ひとりで考えたい』とか『こういうところに関して不安に思っている』と言えばよかったのですが、やはり僕にとって自分の感情を相手に正直に伝えるということはとても難しいことです。」

ラウールの語りからは、自分の感情を正直に伝えられなかつことで相手に誤解され、大切なものを失ってしまったことへのやるせなさが伝わってきた。

一方、女性目線からも、男性が感情を表現しないことがコミュニケーションにもたらす摩擦について、驚きや残念に思う気持ちが語られている。エレナは、当時の恋人が親戚の死による悲しみを表に出さず、後になってその辛さを打ち明けた際の驚きを振り返った。

エレナ：「以前、私が当時付き合っていた彼氏の親戚が亡くなったときがありました。彼は、特に悲しい様子も見せず普段通りに振舞っていたので、私も『彼は

その親戚とそんなに関係が深くないのかなあ』と思い、いつも通り接していました。しかし、その2週間後に、その時はとてもつらい思いをしていましたことを突如として彼から告げられ、本当に驚いたことを今でも覚えています。その時に、もしつらいということを私に言ってくれていたなら私も慰めの言葉をかけたり、彼を精神的に支えたりすることができたと思いました。少し残念な気持ちがしたと同時に、ここまで人の感情が、表情や態度では理解することができないことがあるものなのか、と怖くも感じました。」

これらの語りから、男性が感情を表現しないことで生じる誤解や摩擦が、恋人や友人との関係に悪影響を与える様子が浮かび上がった。ラウールやエレナのエピソードは、メキシコ男性が感情を伝えないことが、相手に誤解を与えること、信頼を揺るがしたりする場面を具体的に示している。特に、男性が自身の内面を隠すことで、相手に心の状態や意図が正確に伝わらないことが関係性に影響を及ぼしていることがうかがえる。

5. 考察

本研究の調査対象であるグアダラハラの大学生たちは、大都市で生活し、高等教育を受ける中でフェミニズム運動に触れ、ジェンダーやマチスモに関する議論の機会を得ている。これにより、自身の価値観に一定の変化が見られるものの、幼少期や思春期に家庭や学校生活を通じて刷り込まれたマチスモ的価値観を根本から変えることは容易ではないという現実が明らかになった。家庭や学校、友人関係といった日常的環境に深く根付いた伝統的なマチスモ的価値観は、大学で得られる現代的な価値観を凌駕するほどの影響力を持つ。本研究は12人の学生を対象としたインタビュー調査に基づいており、その結果をメキシコ全体の若者に一般化するには限界がある点に留意が必要である。ただし、グアダラハラのような大都市で高等教育を受ける学生ですら、マチスモの影響が顕著であることは、メキシコ社会全体においてマチスモが非常に強い支配力を持つことを示唆している。

また、第3章では、マチスモが男性のアイデンティティ形成において「自己不一致」をもたらすことについて論じた。ここでは、この第3章で概観したヒギンスの「自己不一致理論」を用い、調査対象者の語りをもとに、マチスモが彼らのアイデンティティ形成に及ぼした具体的な影響を考察する。調査対象者の語りからは、強力なジェンダー規範であるマチスモが、外部からの評価と自己の内的な欲求や感情との間に大きなギャップを生じさせ、「自己不一致」を引き起こす過程が浮かび上がる。この考察では、「実際の自己と義務の自己の不一致」と「実際の自己と理想の自己の不一致」という二つの側面に分け、それぞれの影響について分析を進めていく。

(1) 実際の自己と義務の自己の不一致

第3章で述べたように、「義務の自己」とは、他者からの期待や社会的役割に基づき、個人が「こうあるべきだ」と認識する特性を指す概念である。本研究のインタビュー調査においても、彼らの語りから、マチスモというジェンダー規範が「実際の自己」と「義務の自己」の間に不一致を生じさせている現実が明らかになった。「実際の自己」と「義務の自己」の不一致は、内面的な感情と外部から課される価値観が調和を欠く状態を指す。調査対象者の語りには、「悲しい」「つらい」といった内面的な感情（実際の自己）に対し、「男なら泣くな」「毅然とした態度を取れ」といったマチスモ的価値観（義務の自己）が強く影響し、それが自己に内面化されている状況が浮かび上がった。その結果、ある学生は「悲しいのに笑顔を作ってしまう」と語り、感情の混乱が日常生活に影響を及ぼしていることを示した。このような事態は単なる感情の抑制を超えて、エリクソンが指摘する「もはや自分が誰か分からぬ状態」を体現しており、「アイデンティティ危機」の一端が具体的に表れているといえる。

また意外であるが、男性自身がマチスモの被害者であるという事実を「語らない」という行動も、自己不一致の結果として表れていると分析できる。男性が声を上げない理由は、現代メキシコ社会において女性の権利が拡大する一方で、男性の課題が「見えないもの」として扱われているという事実のみに起因するわけではない。このような「沈黙」は「男は弱音を吐かない」という外発的同調動機によって、マチスモによる苦しみすらも「男らしさ」を実現するための代償ととらえてしまう結果としても解釈することができる。また彼らが少年期より求められる、「多くの女性と恋愛や性的関係を持つべき」「男なら泣いてはいけない」「男は感情を表にしてはいけない」「男は女らしいものを好んではいけない」といった規範も、外発的同調動機の典型的な例であるといえる。

一方で、実際の自己と義務の自己の不一致は、第3章で概観した「外向的反応」としても表れる。例えば、現代メキシコ社会でフェミニストによって批判される、男性の「支配的態度」「性別役割の固定化」「暴力性や攻撃性」は、この不一致がもたらす典型的な外向的反応として解釈できよう。また、調査対象者12人中10人が、自らの父親を「マチョ」と定義しており、家庭環境がこうした価値観の再生産に重要な役割を果たしていることが示唆された。特に、父親の支配的な態度や性別役割の固定化は、次世代にマチスモ的規範を引き継ぐ要因として作用し、男性の自己認識に影響を与えている。

また、メキシコ社会におけるホモフォビアも、外交的反応として理解できる。彼らの多くが、幼少期からマチスモ的規範に反する行動を取ると「女の子みたい」「ゲイなのではないか」と揶揄される経験を語っている。この経験を通じて、「男らしくない=ゲイである」という固定観念が内面化されていく過程が、彼らの語りからも浮かび上がった。このような背景が、メキシコ全体はもちろん、ジェンダーにおいて比較的先進的とされるグアダラハラにおいてさえ、ホモフォビアが根強く残る一因となっていると考えられる。

このように、マチスモ的価値観が「実際の自己」と「義務の自己」の不一致を通じて、男性の感情表現や行動に深刻な影響を与えていていることが分かる。これらの不一致は、内面的

な感情の抑制から人間関係における摩擦や誤解に至るまで、様々な形でその影響を及ぼしている。

(2) 実際の自己と理想の自己の不一致

「理想の自己」とは、個人が自身に対して抱く理想像、すなわち「自分がなりたい姿」を指す概念である。第3章で説明したように、実際の自己と理想の自己の間に不一致が生じる場合、一般的には自己の理想像に近づくための内面的な目標を追求する行動が見られるとされている。しかし、本研究のインタビュー調査では、理想の自己に向けて努力する姿勢よりも、不一致が引き起こす「内向的反応」として現れる劣等感や自己評価の低下など、負の感情について語られた内容が多かった点が非常に興味深い。調査対象者の語りには、「サッカーが上手」「理想的な強い体型」などといったマチスモ的価値観を内面化することによって形成される理想の自己に対し、「それに達することができない」という実際の自己との不一致に苦しむ様子が浮かび上がった。性的経験や恋愛経験の不足による劣等感も内向的反応の例と言えよう。

このように内向的反応自体は目に見えないものであるが、調査対象者の男子大学生の語りからは、このような内向的反応が「逃避」として形となって現れることが分かる。男性の飲酒、睡眠、薬物の使用、ビデオゲームなど、一見すると個人の趣味や嗜好に見える行動は、社会的・文化的な文脈の中で「実際の自己」と「理想の自己」の不一致が引き起こす内向的反応が形として現れた、逃避手段の一つと解釈できる可能性があることを示唆している。こうした行動の裏には、理想の自己に近づけない自分を守るために心理的メカニズムが働いていると考えられる。

第5章 結論

本稿では、現代メキシコ社会におけるマチスモが若年男性のアイデンティティ形成に及ぼす影響を、文献調査およびグアダラハラの大学生へのインタビューを通じて包括的に考察してきた。ここでは各章で論じてきた内容を総括し、第1章で提示した「マチスモが現代メキシコの若年男性のアイデンティティ形成に与える影響は何か」という問い合わせに対して回答を述べる。さらに、メキシコにおける社会構造やジェンダー意識の変化に向けた社会の在り方を検討し、最後に本研究の課題を述べる。

第1章では、メキシコ社会におけるマチスモが伝統的価値観として根付く一方で、近年の男女平等意識の高まりやフェミニズムの進展による変化が生じている状況を背景に、若者男性がどのようにアイデンティティを形成しているのかという問題に着目した。また、伝統的価値観と現代的変化が共存しマチスモ的価値観が根強く残る一方、若者を中心にジェンダー観に新たな変化が見られる都市として、グアダラハラの大学生を調査対象とした理由を示した。

続く第2章では、マチスモを男性性の一形態として位置づけ、その起源やメキシコ社会における文化的価値としてどのように形成され、普及したのかを歴史的、文化的視点から考察した。スペインによる植民地化で導入されたキリスト教的価値観や先住民男性が抱いた劣等感が、自己肯定を求める行動や家族内での支配的態度を通じてその基盤を強化したことを明らかにした。また、メキシコ革命期にはナショナリズムの高揚を背景に、マチスモが美化され、民謡や文学などを通じて社会的規範として定着する過程を論じた。さらに、第二次世界大戦後には大衆文化がマチスモの美化と普及を後押しし、メキシコ社会全体に浸透したことを示した。

そして第3章では、現代メキシコ社会におけるマチスモの変容と、男性が直面するアイデンティティ危機について考察した。フェミニズム運動やそれに伴うジェンダー研究の進展により、従来肯定的に捉えられてきたマチスモ的価値観が再解釈され、批判されるようになった。この変容を受け、マチスモが男性に与える影響が改めて注目される中で、厳格なジェンダー規範であるマチスモが、男性に自己不一致を引き起こし、それが心理的葛藤やストレスの根源となっている現状が浮き彫りとなった。特に、従来のマチスモ的価値観と社会的変化の狭間で、若年男性は新しい価値観を受け入れることを迫られながらも、従来のマチスモ的価値観から解放されることなく、危機的な状況に追い込まれている。また、彼らの苦悩が社会的に十分認識される機会が乏しく、男性が直面するアイデンティティの危機に対する支援や共感が未だ不足している現状が続いている。

第4章では、グアダラハラの男学生へのインタビュー調査の結果をもとに、マチスモが彼らのアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしているのかをヒギンスの「自己不

一致理論」を用いて考察した。グアダラハラで高等教育を受ける彼らは、現代的価値観に触れる機会を多く持ちながらも、幼少期から家庭や学校で内面化されたマチスモ的価値観が成人後も消えることなく、内面的な葛藤や行動の制約として強く影響を及ぼしていることが明らかになった。また、マチスモ的価値観が彼らの「実際の自己」と「義務の自己」や「理想の自己」との間に不一致を生じさせていることがわかった。この不一致は、「外向的反応」として、支配的な態度や性別役割の固定化といった行動に表れる。一方で、「内向的反応」としては、劣等感や自己評価の低下が現れ、これが感情の抑制や逃避行動などに繋がっている。

本研究では、文献調査とグアダラハラの大学生へのインタビュー調査を通じて、マチスモが現代のグアダラハラの男子大学生のアイデンティティ形成に多面的かつ深い影響を与えていていることが明らかになった。学生たちは、自身の父親を自らが定義した「マチョ」に当てはめて批判的に語るなど、過去の経験におけるマチスモを否定的に捉えている。これは、伝統的価値観と現代的価値観が交錯するグアダラハラという都市において、フェミニズム運動を背景に進行した社会的変化が、高等教育を受ける若者たちの間で「自らの生活からマチスモを排除したい」という意識を育み、彼らのアイデンティティの変化を促していることを示している。

しかし、このような社会の変化に伴いマチスモに対するグアダラハラの大学生たちの価値観が徐々に変化している一方で、マチスモ的価値観は家庭や教育機関、友人関係といった日常生活の中で依然として根強く受け継がれ、再生産され続けている。伝統的価値観の影響は今もなお強く、「マチョであること」は男性に期待される規範として機能し、学生たちの自己概念や行動に深い影響を及ぼしている。第3章で触れたヒギンスの自己不一致理論によれば、マチスモは「実際の自己」と「義務の自己」や「理想の自己」との間に不一致を生じさせ、その結果、暴力やホモフォビアといった外向的反応として現れる場合もあれば、劣等感や自信のなさ、逃避的行動といった内向的反応として表れる場合もある。本研究の調査対象であるグアダラハラの男子大学生においては特に内向的反応が多く見られ、これはフェミニズム運動の影響で男性の暴力性や攻撃性が批判される一方、男性自身に向けられる暴力とも言える内向的反応が軽視され続けている現状を反映しているといえよう。こうした背景の中、マチスモ的価値観と現代的価値観の間で揺れ動く男子大学生たちは、板挟みの状況に置かれ、心理的な負担を強いられている。この負担は彼らのアイデンティティ形成に大きな影響を与えており、無視することのできない重要な課題となっている。

さらに、調査対象となったグアダラハラの女子大学生の語りから、彼女たち自身が無意識のうちにマチスモ的価値観を内面化している現実が明らかになった。彼女たちはフェミニズムを支持し、マチスモを批判する姿勢を示しながらも、経済力があり、主導的で屈強な「男らしい」男性を理想とする傾向が見られた。この矛盾した態度は、ジンバルドーが指摘した「主夫は負け犬とみなされ、『いい人』はモテない」という現象にも通じ、フェ

ミニズムの象徴ともいえる女子大学生さえもマチスモ的価値観の影響から完全には逃れられないことを示すと同時に、男性が新しいジェンダー的価値観を受け入れる上での障壁として作用しているといえる。こうした状況の中で、グアダラハラの男子大学生たちは、「もはや何が正解なのか分からぬ」「何をしても叩かれる」といった感覚を抱き、目指すべきアイデンティティ像を見失う危機的状況に陥っている。従来のマチスモ的規範が社会的に批判される一方で、新しいジェンダー的価値観を受け入れることも、社会的偏見や否定的評価を伴う挑戦となる。

このように、伝統的なマチスモと社会的変化は、グアダラハラの男子大学生のアイデンティティ形成において、マチスモ的規範への適応を求めるプレッシャーと、現代的価値観への適応という相反する期待の狭間で、自己不一致や心理的葛藤を深刻化させる要因となっている。こうした現代社会においてマチスモと社会的変化が若者男性のアイデンティティ形成に及ぼす影響は、グアダラハラのみに当てはまるものではなく、現代のメキシコにおける他の都市においても、同様の葛藤が若者男性の間で起きている可能性がある。ただし、これらの影響がどの程度広がっているかについては、地域ごとの歴史的背景や文化的要因が異なるため、一概に断言することはできない。しかし、グアダラハラで観察された男子大学生や女子大学生の語りに基づく分析は、メキシコ全体の若者に共通する現象を理解する上で重要な示唆を与えるものであるといえるだろう。

それでは、現代メキシコ社会は、長い歴史の中で形成してきた「マチスモ」をどのように克服していくことができるだろうか。

第一に、マチスモの解体は、現代メキシコ社会において不可欠な課題である。男性がこれまでのように自らに向き合わず、口を閉ざしたままであれば、その達成は永久に不可能だろう。男性自身がこれまでの価値観や行動を見直し、自分の在り方を省みる姿勢が求められる。これは、家庭や教育を通じて形成された思考の枠組みやジェンダーに関する固定観念、さらには性差別を許容する社会の風潮といった、マチスモを支える構造に疑問を抱き、それらを解体する過程を意味する。このプロセスを通じて初めて、新たな視点や多様な在り方を模索することが可能になるだろう。

「社会」を構成するのは「個人」である。メキシコにおけるマチスモは、スペインによる植民地化によってもたらされたキリスト教、そして先住民男性に刻まれた劣等感を起源とし、長い歴史を通じて社会に深く根付いた文化的構造であり、その解体が極めて困難であることは明らかである。しかし、その難しさを理由に現状を放置することは許されない。個々人が「今の状況を変えたい」という意志を持ち、行動を起こすことが不可欠である。これまでメキシコ人女性たちは、恐れを乗り越え、不平等な状況への怒りを行動に変えたことで、フェミニズムという社会運動を生み出し、千年以上続いた家父長的社會に劇的な変化をもたらしてきた。現在も若い女性たちは、声を上げ続け、その運動を前進させていく。同様に、男性もまた、マチスモによる強制的な「男らしさ」の枠組みに縛られる現状からの解放を目指すべきである。いまだ多くの男性が、権力を有する者として認識される

一方で、その権力に伴うマチスモ的規範の圧力に苦しみ、アイデンティティの危機に直面している。男性がこの規範から自由になることは、単なる個人の解放に留まらず、社会全体の変革に向けた重要な一步となる。この変革は一朝一夕に成し遂げられるものではないが、男性が自らの苦悩や課題に向き合い、その意志が集結することで、やがて社会全体に広がる大きな波を生み出すだろう。その波は、恥や嘲笑に屈することなく、男性が多様な在り方を選び取る自由を手にする可能性を示すものである。

さらに、男性がマチスモという抑圧的な枠組みから解放されるためには、それを許容しない現在の社会構造を変えることも不可欠である。現代メキシコ社会では、男性が自らの苦悩やジェンダーに関する意見を公にすることが批判や嘲笑の対象となり、それが男性の沈黙を助長している。この状況は、新たなジェンダー的価値観が生まれつつあるとされるグアダラハラですら見られるものであり、他の地域ではさらに顕著であると考えられる。こうした現状を打破するには、男性が声を上げることを躊躇しない社会的環境を整え、彼らが自身の問題を自由に語れる土壤を社会全体で育む必要がある。そのためには、女性も男性を理解し、歩み寄る姿勢を持つことが重要である。

フェミニズム運動の台頭により、「女性が被害者であり男性が加害者である」という社会的思い込みが広がってきた。しかし、このような単純化された見方は、個々の男性が直面する苦しみや問題を見過ごすことにつながる。この風潮を払拭し、たとえマチスモ的気質を持つ男性であっても、その規範に縛られ、自己不一致に苦しむ被害者としての一面を持つことを認識する必要がある。このような認識が広まることで、男性の内面的な苦悩に寄り添い、支援する取り組みが進むだろう。

また、ジェンダー平等の実現をフェミニズムだけに依存するという固定観念も見直すべきである。男女が互いに歩み寄り、「女性対男性」という対立構造を解消することが、互いの異なる経験や視点を尊重し、共に協力して課題を解決していくための基盤を築く鍵となるだろう。一部のフェミニズム運動において男性を敵視する姿勢が見られる場合、それは社会の分断を助長し、変革を阻む要因となりうる。これに代わり、対話と協力を通じて新たな関係性を築く努力が求められる。

男性がマチスモという規範から解放され、多様な男性性が認められる社会の実現は、現代メキシコ社会において重要な課題である。その実現には多くの時間と試行錯誤を要するだろう。しかし、現在の若者たちは、社会の常識を覆し、より良い未来を築く大きな力を秘めている。SNS を活用したフェミニズム運動や社会運動が示すように、彼らは変革の原動力となり得る存在であり、この先のメキシコ社会を形作っていく責任を担っている。今こそ、若者たち、特に女性だけでなく男性もまた、声を上げる時である。一人ひとりの意識と行動が積み重なることで、新たな価値観と可能性が生まれ、それが社会全体の変化を促す原動力となるだろう。このような積み重ねの中で、固定観念を超えた新たな未来が徐々に形作られることが期待される。

最後に、本研究の課題を整理する。第一に、マチスモやアイデンティティ形成に関する

る文献は膨大であり、時間的制約の中でそれらを網羅し、十分に取り入れることはできなかった。特に、メキシコの若者に特化したアイデンティティ形成に関する研究について、さらなる文献調査を行うことで、議論をより深める余地が残されている。第二に、調査対象者に関する偏りと正確性についての課題である。本研究では、グアダラハラの男女大学生12人を対象にインタビューを行ったが、この規模では調査結果をもってグアダラハラの男子大学生のアイデンティティ形成におけるマチスモの影響を断定するには限界がある。同じグアダラハラの大学生であっても、人種や社会階層、宗教、専攻の違いによって価値観や経験は全く異なることが予想される。加えて、本研究はインタビュー調査を用いた質的研究であるが、非言語的なジェンダー表現や日常的な行動の観察が不足しており、アンケート調査などによるより広範なデータ収集が必要だったと感じている。第三に、研究対象の限定性が挙げられる。本研究ではグアダラハラの20代の大学生を対象にインタビューを行ったため、10代の若者については言及できていない。特に、10代の若者は現在の大学生とは異なる家庭環境や教育背景のもとで、独自の価値観やジェンダー観を持つ可能性が高い。こうした年齢層を含めた調査を行うことで、マチスモが若い世代全体に及ぼす影響をより広範に把握できたと考えられる。以上の課題を踏まえ、今後の研究では、文献調査のさらなる充実、調査対象者の多様化、そして地域や世代間の比較を行うことで、メキシコ社会におけるマチスモと若者のアイデンティティ形成の関係性をより包括的に解明していきたいと考える。

注

(1) BBC News Japan 「メキシコ初の女性大統領誕生へ 与党候補シェインバウム氏が当選確実」 (<https://www.bbc.com/japanese/articles/cjkklnndmmvxo>) より (2024/10/24 参照)。

(2) 世界銀行のウェブサイト (<https://data.worldbank.org/indicator/SE.TER.ENRR.FE>) より (2024/11/17 参照)。

(3) Gobierno de Mexico ホームページ 「DATA MEXICO」 (<https://www.economia.gob.mx/datamexico/es/profile/geo/guadalajara-991401?populationType=totalPopulation>) より (2024/11/28 参照)。

(4) UNESCO ホームページ *La romería de Zapopan: ciclo ritual de La Llevada de la Virgen* (<https://ich.unesco.org/es/RL/la-romeria-de-zapopan-ciclo-ritual-de-la-llevada-de-la-virgen-01400>) より (2024/11/28 参照)。

(5) Paredes, A.
1971 *The United States, Mexico, and “Machismo”*. Journal of the Folklore Institute, Vol. 8, No. 1, pp. 5 より

(6) Paredes, A.
1971 *The United States, Mexico, and “Machismo”*. Journal of the Folklore Institute, Vol. 8, No. 1, pp. 21 より

(7) Paredes, A.
1971 *The United States, Mexico, and “Machismo”*. Journal of the Folklore Institute, Vol. 8, No. 1, pp. 22 より

(8) Sánchez, C. *Baraja de Oro*. Sony Music, 1990.

(9) El País ホームページ 「The second life of Chalino Sánchez, the king of corrido」 (<https://english.elpais.com/culture/2023-05-07/the-second-life-of-chalino-sanchez-the-king-of-corrido.html>) より (2024/11/29 参照)。

(10) 1989年に米国の弁護士キンバリー・クレンショーが提唱した概念であり、ジェンダーが人種、階級、性的指向など他の社会的要素と交差することで生じる抑圧や特権を明らかにした [Castillo 2024:39-41]。

(11) 家父長制を女性抑圧の根源と捉えるラディカル・フェミニズムは、構造的な不平等を根本から解体することを目指し、メキシコ社会にも大きな影響を与えた [Castillo 2024:39-41]。

(12) 1994年の北米自由貿易協定 (NAFTA) 発足に伴うサパティスタ民族解放軍の蜂起では、先住民女性がゲリラ活動に参加し、彼女たちの厳しい社会的状況を可視化するとともに、新たな視点をフェミニズム運動に加えた [国本 2000:252]。

(13) SNS を介した呼びかけにより、メキシコ国内で最もフェミサイド（女性殺害）が多い地域エカテペックからメキシコシティ中心部までの行進が実施され、ジェンダー暴力の深

刻さが広く知られるようになった[Rovira 2021:146]。

(14) フェミサイドという言葉は、単に女性である人が殺害されるという意味ではなく、女性であるがゆえに殺害されることを指し、メキシコでは一日に平均して 10 件のフェミサイドが発生している[Morena 2020:15]。

(15) 2015 年にアルゼンチンで始まった「#NiUnaMenos」（もう一人も犠牲にしない）運動は、ラテンアメリカ全域で街頭やオンラインでの大規模な抵抗活動を促進した[Rovira 2021:146]。

(16) 1953 年の女性参政権の成立後、メキシコでは 1993 年にジェンダー・クオーター制が導入され、選挙候補者リストの女性割合を段階的に引き上げ、2014 年には男女比 50% の完全なパリティ制が憲法で定められた[国本 2015:252]。

(17) Mon Laferte. "Pla ta ta." YouTube.

(https://youtu.be/tAcJhezQz7E?si=Vee_vA_nVMK6Sad2) より (2024/12/18 参照)。

(18) INEGI ホームページ *Volencia contra las mujeres en México*

(<https://www.inegi.org.mx/tableroestadisticos/vcmm/>) より (2024/12/18 参照)。

(19) INEGI ホームページ *Volencia contra las mujeres en México*

(<https://www.inegi.org.mx/tableroestadisticos/vcmm/>) より (2024/12/18 参照)。

(20) WHO ホームページ *The Global Health Observatory*

([https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/life-expectancy-at-birth-\(years\)](https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/life-expectancy-at-birth-(years))) より (2024/11/16 参照)。

(21) WHO ホームページ *The Global Health Observatory*

([https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/life-expectancy-at-birth-\(years\)](https://www.who.int/data/gho/data/indicators/indicator-details/GHO/life-expectancy-at-birth-(years))) より (2024/11/16 参照)。

(22) WHO 2021 *Suicide worldwide in 2019* pp.19,27 より

参考文献

綾部恒雄

2006 『文化人類学 20 の理論』 弘文堂:pp231-248。

綾部恒雄

2010 『よくわかる文化人類学第 2 版』 ミネルヴァ書房:pp78-87。

Benítez, F.

2018 *Principales Logros Y Retos Del Feminismo En México*, Espacios Pùblicos vol. 21, nùm. 51, Universidad Autónoma del Estado de México:pp. 115-134.

Bunster, X.

1986 *La tortura de prisioneras políticas: un estudio de esclavitud sexual femenina*.

Portugal: ISIS Internacional: 13.

Buchenau, J

2015 *The Mexican Revolution 1910-1946*. Oxford Research Encyclopedia.

<https://doi.org/10.1093/acrefore/9780199366439.013.21> (2024/11/27 参照).

Castañeda, M.

2019 *El Machismo Invisible*. Mexico: Debolsillo.

Castillo, I

2024 *La Tercera Ola del Feminismo en México: Logros y Desafíos*, Revista de Divulgación Científica, Cultural y Educativa; pp.39-42.

Cerva, D.

2020 *La protesta feminista en México. La misoginia en el discurso institucional y en las redes sociodigitales*, Revista Mexicana de Ciencias Políticas y Sociales pp. 177-205.

Cowan, B. A.

2017 *How machismo got its spurs—in English: Social science, cold war imperialism, and the ethnicization of hypermasculinity*. Latin American Research Review, 52(4), 606-622.

エリクソン、E.

1992 『幼児期と社会 1』 仁科弥生訳、みすず書房。

ギルモア、D.

1994 『男らしさの人類学』 前田俊子訳、春秋社。(David D. Gilmore, *Manhood in the Making- cultural concepts of Masculinity*.)

林和宏

2004 「揺らぐマチスモ『転換期』 メキシコにおける男性アイデンティティ」、ラテンアメリカ・カリブ研究 第 11 号: 1-11 頁。

2005 「マチスモを通して見るラテンアメリカ・フェミニズム—メキシコを足がかり

に」、ラテンアメリカ・カリブ研究 第12号: 25-34 頁。

Heep, H.

2014 *Catholicism and Machismo: The Impact of Religion on Hispanic Gender Identity. Cultural and Religious Studies*, ISSN 2328-2177 February 2014, Vol. 2, No. 2, pp. 100-108.

Hernández, A.

2013 *El corrido mexicano: un fenómeno histórico-social y literario*, Contribuciones desde Coatepec, No.24, pp. 29-43, Universidad Autónoma del Estado de México Toluca, México.

Higgins, E.

1987 Self-Discrepancy: A Theory Relating Self and Affect, *Psychological Review* vol.94, No.3, The American Association: pp.319-340.

井上幸孝

2012 「植民地時代メキシコにおける西洋文化の導入とナワトル語訳『イソップ寓話』」博士論文、専修大学。

ジャブロンカ、I.

2024 『マチズモの人類史: 家父長制から「新しい男性性」へ』村上良太訳 明石書店。

Klinken, P.

2013 *Jesus Traditions and Masculinities in World Christianity*, Exchange 42 pp1-15, Utrecht University, The Netherlands.

国本伊代

2000 『ラテンアメリカ 新しい社会と女性』新評論。

2015 『ラテンアメリカ 21世紀の社会と女性』新評論:253-266。

経済開発協力機構(OECD)

2023 『図表でみる教育 OECD インディケーター(2023年版)』明石書店。

ルイス、O.

1986 『サンchezのこどもたち』柴田稔彦、行方昭夫訳、みすず書房。

松久玲子

2002 『メキシコの女たちの声 メキシコ・フェミニズム運動資料集』行路社。

2010 「メキシコのフェミニズム運動と女性政策」、京都ラテンアメリカ研究所紀要 = Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de Kyoto = Boletín del Instituto de Estudios Latino-Americanos de Kyoto / 京都ラテンアメリカ研究所『紀要』編集委員会 編 (10) 2010.12:pp.127-152、京都 : 京都外国语大学京都ラテンアメリカ研究所。

<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000004-I11047545> (2024/12/09 参照)。

ミード、M.

1961 『男性と女性：移りゆく世界における両性の研究』田中寿美子、加藤秀俊訳、東京創元社。

Mendoza, T.

1962 *El Machismo En Mexico*, Cuadernos del Instituto Nacianal de Investigaciones Folkloricas Vol.3; pp75-86, Argentina.

Monsiváis, C.

2002 *Escritos Sobre El Cine Y El Imaginario Cinematográfico*, Revista Iberoamericana, Vol. 68, No. 199; pp.113-116.

Morales, E.

2015 *Machismo(s): A Cultural History, 1928 – 1984*.

Morena, I.

2020 *Gender Violence In Mexico Machismo, Femicides, And Child's Play*, Harvard University.

ナサンソン、P.

2016 『広がるミサンドリー ポピュラーカルチャー、メディアにおける男性差別』久米泰介訳、彩流社。

大泉光一、牛島万

2005 『アメリカのヒスパニック＝ラティーノ社会を知るための 55 章』明石書店。

オスター、P.

1992 『メキシコ人』野田隆他訳、晶文社。

オートナー、S.

1987 『男が文化で、女は自然か？性差の文化人類学』山崎カヲル訳、晶文社。

Paredes, A.

1971 *The United States, Mexico, and "Machismo"*. Journal of the Folklore Institute, Vol. 8, No. 1, pp. 17-37.

パス、O.

1984 『孤独の迷宮—メキシコの文化と歴史』高山智博、熊谷明子訳 法政大学出版局。

Ramirez, J.

2008 *Against machismo: young adult voices in Mexico City*. Berghahn Books.

ラモス、S.

1980 『メキシコ人とは何か—メキシコ人の情熱の解明—』山田睦男訳、新世界社。

Rodríguez, Z.

2013 *Machos y machistas. Historia de los estereotipos mexicanos. La ventana* vol.5 no.39 Guadalajara ene./jun. pp. 254-260.

Rovira, G

2021 *Activism and affective labor for digital direct action: the Mexican #MeToo campaign*,

Social Movement Studies, 22:2, 145-162.

<https://doi.org/10.1080/14742837.2021.2010530> (2024/12/09 参照).

Simmons, E.

1963 *The Ancestry of Mexico's Corridos Authors*, The Journal of American Folklore Vol. 76, No. 299, pp. 1-15, American Folklore Society.

Stanaland, A.

2023 *When Is Masculinity "Fragile"? An Expectancy-Discrepancy-Threat Model of Masculine Identity*, Personality and Social Psychology Review 2023 Vol. 27(4):359 –377.

Torres, R.

2020 *Mariachismo: Music, Machismo, and Mexicanidad*. University of North Texas.

https://digital.library.unt.edu/ark:/67531/metadc1752344/m2/1/high_res_d/TORRES-DISSERTATION-2020.pdf (2024/11/29 参照).

上野千鶴子

1998 『ナショナリズムとジェンダー』 青土社。

Valdez, L.

2023 *Breaking Down Machismo: Shifting Definitions and Embodiments of Latino Manhood in Middle-Aged Latino Men*. American Journal of Men's Health September-October. 1–12.

山口昌子

1982 『フェミニズムの歴史』 白水社:16。

山本光雄

1961 『政治学』 岩波文庫 青 604-5 岩波書店。

ジンバルドー、F.

2017 『男子劣化社会 ネットに繋がりっぱなしでつながれない』 高月園子訳、晶文社。

Summary

Machismo and the Construction of Masculine Identity in Contemporary Mexico

The aim of this thesis is to elucidate the cultural influence of "machismo" on the identity formation of young people in Mexican society. Specifically, this study analyzes the reconstruction of machismo and its effects, using Guadalajara as a field site and interviews with male and female university students. Chapter 1 highlights the persistence of machismo as a traditional value in Mexican society, while contextualizing the rising awareness of gender equality and feminism. It also establishes the rationale for selecting Guadalajara and outlines the study's objectives and methodologies. Chapter 2 examines the origins and cultural construction of machismo from a historical perspective. It explores how Christian values and patriarchal structures introduced during Spanish colonization, along with indigenous men's feelings of inferiority, formed the foundation of machismo. The chapter also discusses how nationalism during the Mexican Revolution and cultural expressions such as folk songs and literature normalized machismo. The post-World War II era is analyzed for how media like film and music further idealized machismo as a societal value. Chapter 3 investigates the transformation of machismo in contemporary Mexican society and the identity crises faced by men. Feminism and gender studies have reinterpreted traditional machismo values, shifting perceptions of its core ideals toward critiques of negative aspects such as "violence" and "power dynamics." Rigid masculine norms create self-discrepancy, causing psychological distress, while support for these challenges remains insufficient. Chapter 4 analyzes interview results using Higgins's "self-discrepancy theory." Findings reveal that while students exposed to higher education adopt modern values, machismo internalized through family and school creates conflicts, reflected in discrepancies between the "actual self," "ought self," and "ideal self." Chapter 5 synthesizes the findings, examining how machismo is reconstructed at the intersection of traditional and modern values. The study concludes that machismo's influence on young people remains a key issue for achieving gender equality and cultural change. This research offers insights into identity formation and implications for the reinterpretation of gender and culture in Mexico.

謝辞

本稿を書くにあたって助言、協力してくださったすべての方に、この場を借りて感謝の意を示したい。

まず、本稿を作成するにあたってご指導いただいた関根久雄先生に心より御礼を申し上げたい。テーマの選定に難航し、迷い続ける筆者に対して、的確な助言を与えてくださったことに深く感謝する。また、ぎりぎりの段階でのテーマ変更という無謀ともいえる決断を寛大な心で受け入れていただいたことに対し、申し訳なさとともに深い感謝の念を抱いている。さらに、卒論作成のみならず卒業後の進路や人生についてもアドバイスを下さり、その言葉が迷いや不安を乗り越える大きな支えとなったことにも深謝する。

さらに、インタビュー調査に快く応じてくれたメキシコ・グアダラハラ大学の学生たちにも深く感謝する。彼らの協力がなければ、本論文を完成させることはできなかつたであろう。本インタビュー調査では、非常にプライベートな領域に踏み込む内容も含まれており、当初は調査自体が成立するのか不安を抱いていた。しかし、依頼したすべての学生が快諾し、自らの人生や想いについて熱意を持って語ってくれ、彼らの生の声を聞けたことは筆者自身の考え方には大きな影響を与えるとともに、かけがえのない経験となった。ありがとうございました。

加えて、先輩、同期、後輩を含む関根ゼミのみなさまにも心より感謝する。毎回のゼミでは、さまざまなテーマについて皆の意見を聞くたびに、その深い洞察や鋭い視点に感銘を受け、私自身にとって大きな刺激となった。また、独立論文や卒業論文の中間発表の際には、貴重なアドバイスやコメントをいただき、それが本研究を進める上で大きな助けとなったことに改めて感謝の意を表したい。

最後に、本研究および大学生活において、これまで私を支えてくれた家族に感謝を述べたい。両親は進路選択や海外留学を含めて、筆者の想いを常に尊重し応援し続けてくれたとともに、経済的・精神的に支えてくれた。家族がいなければ、無事大学を卒業することもこの卒業論文を書き終えることもできなかつたであろう。

改めて、本稿制作あたりお世話になったすべての方に心から感謝する。ありがとうございました。